

大平山遺跡群調査報告書

昭和63年3月

江津市教育委員会

浜田市教育委員会

大平山遺跡群調査報告書



大平山遺跡群の位置

昭和63年3月

江津市教育委員会

浜田市教育委員会

例 言

1. 本書は、江津市教育委員会・浜田市教育委員会が昭和62年度に実施した、大平山遺跡群発掘調査の報告書である。調査は、遺物包含層の遺存状況・範囲等を確認することを目的として実施した。
2. 調査は、島根大学歴史学研究室及び島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導者 田中義昭(島根大学教授)、宮沢明久(島根県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長)
川原和人(同埋蔵文化財第2係長)、卜部吉博(同文化財保護主事)、松本岩雄(同)
足立克己(同主事)

事務局 小林義正(江津市教育委員会教育長)、砂田 忠(同社会教育課長)、河野将司(同
社会教育係長)、飯田英貴(同主事)
半田 淨(浜田市教育委員会教育長)、飯泉清次(同社会教育課長)、神野邦男(同
社会教育係長)、斗光秀基(同主事)

調査員 吾郷和宏(島根大学考古学専攻卒業生)

調査補助員 新海正博(島根大学学生)、松尾晴可(同)、萩森貴則(同)、岡本悦子(同)、
柴尾由美(同)、西尾秀道(同)、物部茂樹(同)、間野大丞(同)

調査参加者 柏村保雄、中村忠男、和田浅一、小山美智徳、山藤義隆

調査協力者 宮本徳昭、柳浦俊一

なお、遺物整理及び作図・製図・写真撮影には上記のほかには次の者も参加して行なった。

赤坂二史、大西貴子、池淵高史、木瀬高宏、河村創造

3. 発掘調査に際しては、地元の方々、島根県土木部都市計画課、浜田七木建築事務所をはじめ、山口芳郎、林 秀樹、山崎良美、木佐幸佳の各氏から終始献身的な協力をいただいた。また、石器の石材鑑定については、島根大学理学部地質学教室をお願いした。記して感謝の意を表したい。
4. 本書の執筆は、調査指導者、調査員、調査補助員が行ない(執筆者名は目次及び各項末尾に記す)、編集は田中義昭の指導のもとに松本岩雄、新海正博が行なった。

目 次

第1章 調査の動機と経緯	(田中義昭)	1
第2章 大平山遺跡群の概要	(田中義昭・吾郷和宏)	4
第1節 大平山遺跡群の位置と周辺の遺跡		4
第2節 波子遺跡の発見と小研究史		5
第3節 大平山遺跡群としての把握		10
第3章 発掘調査	(吾郷和宏)	12
第1節 波子遺跡の調査		12
1. 調査区の概要		12
(1) A地点		12
(2) B地点		15
(3) C地点		19
2. 出土遺物		19
(1) A地点出土遺物	(松尾晴司)	19
(2) B地点出土遺物		19
a. 縄文土器	(新海正博)	19
b. 弥生土器・土師器	(松尾晴司)	30
c. 石器	(大西貴子・柴尾由美)	34
第2節 大平浜遺跡の調査		42
1. 調査区の概要	(吾郷和宏)	42
2. 出土遺物	(松尾晴司)	47
第4章 分布調査	(吾郷和宏・松尾晴司)	48
第5章 総 括	(田中義昭・新海正博)	50

挿 図 目 次

第1図 大平山遺跡群地形図・調査区配置図	2
第2図 大平山遺跡群の位置	4
第3図 波子遺跡A地点出土土器	6
第4図 無惨に破壊された波子遺跡	7
第5図 波子遺跡周辺地形図・トレンチ配置図	13・14
第6図 波子遺跡B-Ⅲ トレンチ崖面土層断面図	15
第7図 波子遺跡B-I トレンチ・B-VI トレンチ南壁土層断面図	17・18
第8図 波子遺跡A地点出土陶器実測図	19
第9図 波子遺跡B地点出土縄文土器実測図(1)	20
第10図 波子遺跡B地点出土縄文土器実測図(2)	22
第11図 波子遺跡B地点出土縄文土器実測図(3)	24
第12図 波子遺跡B地点出土縄文土器実測図(4)	25
第13図 波子遺跡B地点出土縄文土器実測図(5)	27
第14図 波子遺跡B地点出土弥生土器・土師器実測図(1)	31
第15図 波子遺跡B地点出土弥生土器・土師器実測図(2)	32
第16図 波子遺跡B地点出土石器実測図(1)	36
第17図 波子遺跡B地点出土石器実測図(2)	37
第18図 波子遺跡B地点出土石器実測図(3)	38
第19図 波子遺跡B地点出土石器実測図(4)	39
第20図 大平浜遺跡周辺地形図・トレンチ配置図	43・44
第21図 大平浜遺跡Ⅲ-東 トレンチ土層断面図	45・46
第22図 大平浜遺跡出土須恵器実測図	47
第23図 越峠遺跡出土土師器・須恵器実測図	48

図 版 目 次

- 図版1-1. A地点全景
 -2. A-Ⅲトレンチ黒色土検出状況
- 図版2-1. A-Ⅳトレンチ黒色土検出状況
 -2. B地点全景
- 図版3-1. B地点山頂全景
 -2. B-Ⅰトレンチ上段黒色土検出状況
- 図版4-1. B-Ⅱトレンチ黒色土検出状況
 -2. B-Ⅱトレンチ土層
- 図版5-1. B-Ⅲトレンチ黒色土検出状況
 -2. B-Ⅲトレンチ土層(赤色砂)
- 図版6-1. B-Ⅳトレンチ土器・石器出土状況
 -2. B-Ⅳトレンチ南壁土層
- 図版7-1. B地点出土縄文土器A類・B類(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版8-1. B地点出土縄文土器C類(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版9-1. B地点出土縄文土器C類(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版10-1. B地点出土縄文土器D類(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版11-1. B地点出土縄文土器E類(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版12-1. B地点出土縄文土器E類(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版13-1. B地点出土縄文土器E類・F類(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版14-1. B地点出土縄文土器F類・底部(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版15-1. B地点出土弥生土器・土師器(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版16-1. B地点出土弥生土器・土師器(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版17-1. B地点出土土師器
 -2. B地点出土土師器
- 図版18-1. B地点出土弥生土器・土師器(表)
 -2. 同上(裏)
 -3. B地点出土弥生土器・底部
 -4. 同細部
- 図版19-1. B地点出土石器(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版20-1. B地点出土石器(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版21-1. B地点出土石器(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版22-1. B地点出土石器(表)
 -2. 同上(裏)
- 図版23-1. C地点全景
 -2. C-Ⅰトレンチ黒色土検出状況
- 図版24-1. C-Ⅰトレンチ黒色土検出状況
 -2. 大平浜遺跡Ⅲトレンチ及びⅣ-Eトレンチ
- 図版25-1. 大平浜遺跡Ⅳ-Eトレンチ土層
 -2. 大平浜遺跡Ⅲトレンチ黒色土検出状況
- 図版26-1. 越峠遺跡全景
 -2. 波子A地点・大平浜遺跡出土遺物、
 越峠遺跡表採遺物

第1章 調査の動機と経緯

浜田市と江津市にまたがる波子遺跡は、八東郡鹿島町佐陀講武貝塚、同郡美保岡町サルガ鼻洞窟遺跡、同町権現山遺跡等とともに鳥根県下の代表的な遺跡としてつとに知られてきている。また山陰地方の縄文中期の標準的な土器型式として「波子式土器」が認定されているが、これは波子遺跡A地点から発見された口縁部に貼り付け粘土帯をもつ縄文施文の特徴的な土器に付された名称である。一方この遺跡が海岸砂丘地帯に営まれていることも早くから注目されてきたところである。山陰地方では縄文時代の遺跡分布は他地方と比較してかなり稀薄であり、とくに中期のそれは発見例に乏しい。そうした状況のもとで波子遺跡の実態の把握と研究は、当地方の縄文時代の様相と地域的特色の解明にとってきわめて重要な意義をもつといえるであろう。

さて、浜田市国分町から江津市波子町の海岸一帯にわたってはかねてから鳥根県立石見海浜公園の建設が計画され、一部はすでに事業実施、開園に至っている。そして1987年度には波子遺跡が所在する砂丘地帯の造園工事（浜田市久代町から江津市波子町一帯は石見海浜公園の中心地区＝Dゾーンの建設予定地とされている。ここには総合管理事務所をはじめとす多目的広場、海洋科学センター、レストラン等の施設が配置される）が行われる予定であった。

ところで、波子遺跡は1970年代初期に大規模な採砂が行われた際に壊滅したとされていた。そこで鳥根県教育委員会は造園工事の実施に先だて遺跡の存否を確認し、その結果次第では公園計画の一部変更・遺跡の保存検討が必要との立場から管轄の浜田市・江津市の両教育委員会に対し遺跡の所在と範囲の確認調査を指示した。これを受けて両教育委員会は調査計画を策定し、調査体制を編成した。

調査に当たっては、両教育委員会の依頼により川中義昭（鳥根人学考古学研究室）が責任者となり、吾郷和宏（鳥根大学考古学専攻生OB）が現地調査を担当、両教育委員会社会教育課が総出で調査の進行を支えた。県教育委員会からは文化課第一係長 宮沢明久氏、同文化財保護主事 松本岩雄氏が調査指導に当たられた。調査活動に従事したのは鳥根大学法文学部歴史学教室の学生諸君（新海正博、松尾晴司、萩森貴則、岡本悦子、柴尾由美、西尾秀道、物部茂樹、間野大水）、発掘作業を担当されたのは地元市民の柏村保雄、中村忠男、和田茂一、小山美智徳、山藤義隆の5氏である。さらに八東郡八雲村教育委員会の宮本徳昭氏に長期間にわたって調査に協力いただいたことも当初予定の期間内で発掘を終了しえた大きな要因であった。

調査期間は1987年4月21日から5月9日の19日間とし、途中で1日を休業日にあてた。調査の手

順としては、土器の細片が多数散布していた採砂場の西南部より着手し、そこでの土器の出土状況を手掛りとして順次周囲に発掘区を設けていくこととした。最初の着手点は、地元の方々の教示によると、かつて波子遺跡B地点として紹介された個所に相当する可能性が考えられたので改めてここをB地点と命名し、東側の曲川沿いに残る砂丘部をA地点とした。したがって今回のB地点が従来からいわれてきた波子遺跡B地点と重なることは上記の通りであるが、A地点については以前のそれとはまったく異なるものであることを明記しておく。なお縄文中期の土器が採集されたとされる波子遺跡A地点は採砂によってすでに濫滅したものと判断した。

この大規模な採砂場の北西部にも国道9号線の側から進入した大採砂場が残っている。ここも調査対象地点としてC地点と名付けた。調査は以上の3地点をB・A・Cの順に行い、掘削には分厚く、しかも流水のごとくに崩れる砂を考慮して重機を使用することになった。いずれにしても5～6m、ところによっては10m以上にも達する表層の砂を除去して黒色ないし黒褐色のやや堅い砂層を検出することが重要であり、遺跡と遺物の探索はこの層に向けられるのである。

波子遺跡の西約1kmの国道9号線沿いにも大規模な採砂場がある。日本海側に「コ」の字状に開く形になっているが、東側の露頭には黒色ないし黒褐色の堅い砂層がやや水平に露れている。この層からは以前縄文晩期の土器や土師器、須恵器が採集されたといわれている。本地点もまた公園施設が建設される計画になっているので試掘を実施することにした。遺跡の名称はこの地の字名をとって大平浜遺跡とした。行政上は浜田市久代町に含まれる。

砂丘地帯の最高所である大平山の西方には近年ぶどう園が開かれている。その造成工事に際して土師器、須恵器等が相当量発見され、現在でもかなりの散布を認めることができる。おそらく古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて古代集落が営まれたものと推定される。この地も精査が必要であるが、海浜公園の計画範囲からは外れているので今回は遺物採集程度の調査に留めた。遺跡名は越峠遺跡とした。行政上はやはり浜田市久代町に属している。

以上のように砂丘の断面が露出した個所とか砂が移動して基盤が出ているような所からは往々遺物の採集が行われている。そうした状況から推せば大平山の一帯にはまだまだ未発見の遺跡がいくつか存在するものと考えられる。このことを考慮して波子遺跡、大平浜遺跡、越峠遺跡等を一括して大平山遺跡群と呼ぶこととする。そしてこれまで大平山遺跡とか大平山波子遺跡、あるいは単に波子遺跡と呼称されてきた事情をこの際に整理して「大平山遺跡群・波子遺跡」という形で扱うことにしたい。大平浜遺跡の場合は「大平山遺跡群・大平浜遺跡」とするのが適切な捉え方であり、正確な呼称ということになる。

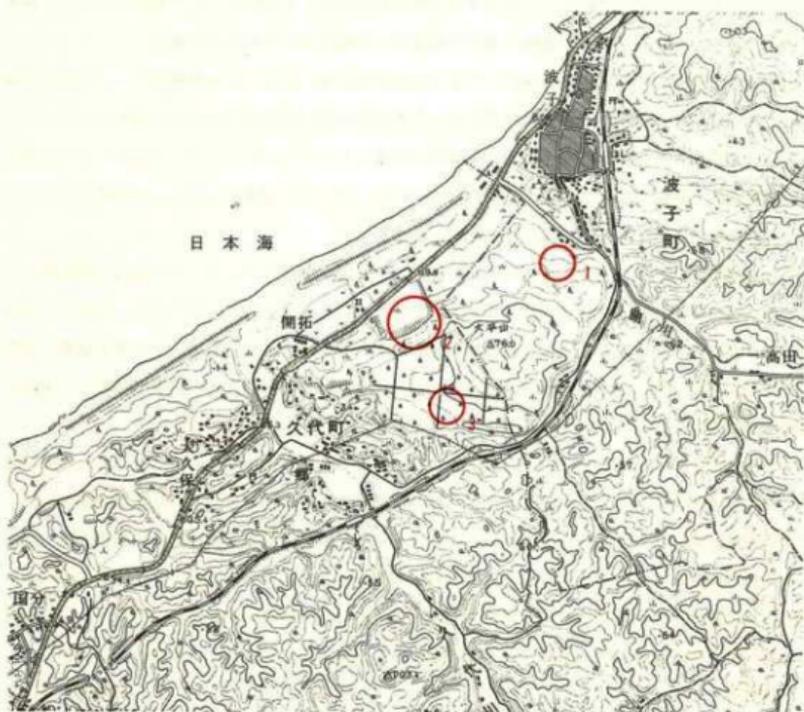
但し、重ねて使用する時は単に「波子遺跡」、「大平浜遺跡」とする。

(田中義昭)

第2章 大平山遺跡群の概要

第1節 大平山遺跡群の位置と周辺の遺跡

江津市の西端で、浜田市との境近くに大平山（標高78m）という小丘があり、JR山陰線の北側にあたる。全山はぼ砂に覆われているが、現状は植樹などによって松林となっている。「波子遺跡」と称される縄文土器等の出土地点は、この大平山の北東麓で、現在遺物出土状況が確認できるのは



第2図 大平山遺跡群の位置
(1：波子遺跡 2：大平山遺跡 3：越峠遺跡)

1 : 50000

曲川にかかる国道9号線の橋から上流に向かって約300m入った採砂跡地である。本地点は行政上江津市波子町波子に属している。また大平浜遺跡は、波子遺跡から西方に約1kmの国道9号線沿いにある採砂跡地で発見された。この遺跡は浜田市久代町に属している。

周辺の遺跡の分布についてみると、調査が十分に行なわれていないこともあって、既存の遺跡数は少なく、特に縄文・弥生時代の遺跡は稀少である。ただ、遠隔地ではあるが弥生時代の墳墓として有名な江津市後地町波来浜遺跡が同じ砂丘に立地していることが注意される。また、都野津町から教川町にかけては稲荷山遺跡・半田浜遺跡・青山遺跡が知られる。古墳～奈良時代の遺跡は比較的数が多く、江津市内では16ヶ所知られている。周辺では、二宮町青山遺跡・都野津町半田遺跡・教川町古八幡遺跡がある。奈良・平安時代には、西に隣接する浜田市国府町に石見国府や国分寺、国分尼寺が置かれてこの地方の政治的な中心となった。比較的古墳が集中している地区としては、古墳時代後期の群集墳として有名な都野津町高野山古墳群などがあり、浜田市国府町から下府町、上府町にかけての一带にも群集墳がみられる。その他は単独墳が散在しているにすぎず、都野津町半田浜に数基の古墳、有福温泉町に1基が知られるのみである。

第2節 波子遺跡の発見と小研究史

1. 波子遺跡の発見

波子遺跡が発見されたきっかけは、地元の高校生が縄文土器を採集して、これを当時浜田高校の教諭であった山崎義助氏のもとに持参したことにある。かねてより石見地方の縄文時代遺跡の探索に関心を抱いていた山崎氏は、同僚の教諭と考古学クラブの生徒を伴って直ちに現地踏査を行った。1949(昭和24)年6月のことである。

この時に山崎氏等が行った調査は前後3回に及んでいる。第1回の調査は、遺跡の概況の把握と遺物採集が主眼であった。山崎氏を中心に3名の教諭と考古学クラブ生 約20名が参加、「持て余す程」の量の遺物を収集したとある。第2回目の調査では簡単なトレンチ発掘がなされたようである。報告によると地表下約40cm辺りに遺物包含層が存在し、ここから石鏃、石錘、土器片が多数検出されたようである。以上2回の調査はいつ頃実施されたのかについては期日が報告書に明記されていないので判然としないが、前後の脈絡から1949年の7月頃かと考えられる。

第3回調査は同年の11月末に実施されたようである。この調査では縄文土器と弥生土器の存在を遺跡の層位関係において捉えることを目的としている。発掘もその意図に従って行われたようであるが、詳細は不明である。報告書には3回の調査によって得られた遺物の記載とスケッチが載せら

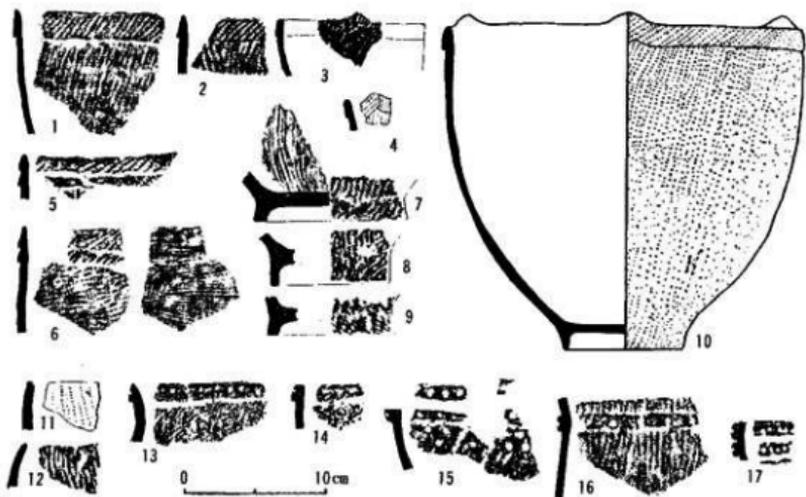
れている。それを見ると縄文中期、後期の土器片の存在が認められるし、弥生後期の土器、土師器類が比較的多く採集されたように見受けられる。

けだし波子遺跡の発見と最初の調査が、高校のクラブ活動として行われたことに、一つの時代性がうかがわれるとともに、戦後の縄文遺跡の調査がこのような形で開始されたことを記憶しておく必要があると思う。

2. 波子式土器の提唱

浜田高校考古学部による調査後の8月には山本 清氏が池田満雄、桑原紹一の両氏を伴い波子遺跡を踏査されている。その際浜田高校考古学部の採集遺物も実見され、その結果を「西山陰の縄文式文化」に記載された。これによって波子遺跡の考古学的な輪郭が明瞭になったわけである。その要約を示せば次ぎのようになる。

i) [遺跡について] まず遺物の散布範囲は径約50mに及ぶこと。包含層は北方のA地点と南方のB地点の2ヶ所に存在すること。A地点はB地点より約2m低い個所にあり、20~30cmの表砂下に20cm内外の包含層が断続的に認められること。出土土器は「郡山(1)c, dに当たる」もの(縄文中期)に限られること。またB地点では厚さ20~30cmの包含層が露出しており、そこには縄文後・



第3図 波子遺跡A地点出土土器 (1類a(波子式)1~10, 1類b11~12, 1類c13~15, 1類d16~17)
(参考文献2より)

晩期、弥生後期、古式土師器等の土器が包含されていること等の諸点を確認している。

ii) 「遺物について」 A地点出土土器はこれを2類に分ける。1類は縄文地土器で5種に細分する。量的には1類aとした縄文地反転口縁土器が圧倒的に多し、この土器をもって「波子式」土器と呼称することを提唱している。1類b=1類aの具体ないしはこれより変化したものとしている。

B地点出土の土器についてはこれを7類に細分する。それらのうちB₁=沈線文土器、B₂=磨消縄文土器、B₃=緑帯文土器、B₄=磨消沈線縄文土器の4類は縄文後期の通有のタイプとみる。B₅=磨研無文土器として分類したグループは九州の「五領式」類似の土器群とみて晩期初頭に位置付けた。

石器については、打製石斧、石鎌が認められるが、各々に伴出する土器は定かでないとしている。

また、黒曜石製の石鎌が見当たらないことにも注意を払っている。

山本 清氏による以上のような調査と整理・研究によって波子遺跡の概要がほぼ明らかとなり、これにより山陰地方における有数の縄文時代遺跡であることが確定されたわけである。とくに縄文中期の地域的な土器型式として「波子式」が設定されたことは、以後のこの方面の研究に一つの基準を与えたものとして注目される。ここで触れておきたいことは、B地点には弥生後期の土器や古式土師器が包含されているという指摘についてである。ややもすると波子遺跡は縄文時代の遺跡という側面だけが強調され、弥生時代や古墳時代の遺跡でもあるということが看過されがちであるが、山本氏がB地点の事実についてもこれを明確にされていることをこの際確認しておかねばならないであろう。なお1952年夏に井上洞介氏が小規模な発掘を試みている。

3. 波子遺跡の破壊

1974(昭和49)年初に江津市文化財審議委員の森本幸治氏が大規模な採砂による波子遺跡の破壊を実見して市に通報した。江津市からの知らせを受けて1月21日県教育委員会文化財保護主事の前島巴基氏が、2月13日には同保護主事門脇俊彦氏がそれぞれ実状調査に来跡し、続いて2月18日には山本清氏が現地の調査に赴いた。そこで判明したことは、過去1年間にわたっておおがかりな砂取りが行なわれ、これによってA地点は消滅し、B地点の包含層も相当の破壊を蒙ったことが明らかになった。その後この採



第4図 無惨に破壊された波子遺跡
(崖面に斜めに走る黒い層が遺物包含層)

砂跡はビニール水田の実験場として水稻の促成栽培が行われたり、子供の遊び場として利用されたようである。

4. 波子遺跡と「波子式」土器研究の進展

山陰地方における type・site として認定された波子遺跡は、その後当地方はもとより中国地方の縄文時代研究にとっては避けて通れない存在となった。1970年以降には「波子式」土器の吟味、遺跡の性格の再確認、同時期の山陽地方の縄文土器との対比、地域史における遺跡の位置付けといったことが試みられてきている。以下その代表的な研究を示してその展開状況をみたい。

i) 矢道正年『島根県の縄文土器集成』1974年。波子遺跡の破壊が公にされた年に矢道正年氏により島根県下の縄文時代遺跡と出土土器の集成が行われた。散発的ではあるが、県下のかんりの地域で縄文土器の発見があり、これらを総覧して採集・出土状況を明らかにし、土器の型式的特徴を確認することはこの時点においてはとくに必要なことであり、きわめて意義のある仕事といえる。

この作業において矢道氏は波子遺跡を「大平山遺跡」として紹介し、縄文土器については山本清氏の認識をほぼ踏襲しながら、A地点では「縄文地貼り付け口縁土器（「波子式」）が基調をなすとして、この土器の特徴を細かく指摘している。そして隠岐郡山遺跡の土器と対比し、「縄文地貼り付け口縁土器」が「縄文地刻み目散隆起線土器」や「縄文地爪形土器」に後続する型式であることを明らかにしている。

ii) 門脇俊彦「原始社会の諸相、江津市の縄文遺跡」(『江津市誌』上巻)1982年。これは石炭地方の縄文時代を概観したもので、当該地方に関するこの段階での一応の総括と見做しうるものである。波子遺跡については矢道氏の場合と同様に「大平山遺跡」として解説されている。まず遺跡の性格に関してA、B両地点とも出土土器の量が豊富であることから「比較的大規模な定住性の強い拠点の集落であった」と推定する。

A地点出土土器については山陽地方の船元式との共通性の存在を指摘し、B地点のものについては同じく山陽地方の中津式、彦崎KⅡ式、九州地方の御領式等に共通する要素が認められるとしている。また石器の石材に黒曜石を用いたものが見当たらないことを遺跡の在り方の問題として特記すべきこととしている。

以上の遺跡と遺物の検討の上に「大平山遺跡」の消長を山間部の邑智高原の遺跡群の消長と比較しながら、縄文中期に「大平山遺跡」を中心に海岸部に遺跡が集中する現象に注意を払い、後期以降に石見沿岸部に多数の遺跡が出現する傾向について、これを自然環境の変化にともなう居住圏の変動として捉える見方を打ち出している。さらに黒曜石製土器等が未発見の事実については山本、矢道両氏も指摘したところであるが、門脇氏はこの点については特記事項として注目し、隠岐産と

姫島産のいずれの黒曜石の交易圏にも属さない経済圏が石東・石中央地方に存在した可能性を示唆している。

『江津市誌』歴史編・縄文時代の項に示された門脇氏の業績の評価は、石見地方全域を視野に入れて縄文時代遺跡の動態の中に波子遺跡を位置付け、ここを拠点として群小の遺跡（門脇氏はキャンプ集落と規定）が一定地域に分散する遺跡群として存在したことの意義を説いたことに向けられるであろう。

iii) 角田清美「山陰海岸・江津砂丘地帯の地形」（『高地性集落と倭国人乱』・小野忠熙博士退官記念論集）雄山閣、1984年。波子遺跡が砂丘地帯に立地していることは周知の事実である。原始・古代集落跡としての波子遺跡に居住した人びとがそのような地質的、地形的条件を、縄文、弥生、古墳、歴史の各時代においてどのように取り込むことによってこの地を生活の場となしえたかということは、集落立地の問題としてきわめて重要であるにもかかわらず、具体的な解明の手は着けられていない。角田氏は自然地理学の立場からこの問題に迫ろうとしている。所論中波子遺跡との関わりで論及されているのは次ぎの点である。

まず波子遺跡が位置する大平山一帯の砂丘は、江津砂丘地帯を構成する一区域として大平山砂丘地と命名する。砂丘地は基盤の都野津層群の上部に「旧期砂丘砂層」が堆積しており、その上面に北西より南東方面に傾斜する「下位クロスナ層」がみられるとする。この上に「新期砂丘砂層Ⅰ」が載り、その上面に「上位クロスナ層」が横たわって、さらにその上に「新期砂丘砂層Ⅱ」が堆積するとしている。「下位クロスナ層」の形成年代については、山崎義助他「波子遺跡」島根県立浜田高等学校・1953年の引用として、この層からは「堀之内式・加曾利B式などの縄文時代後期、縄文時代晩期の安行式、弥生時代前期の遠賀川式土器、5～6世紀の土師器片および石器や土錘などが多数出土する」ので「縄文時代後期から古墳時代（5～6世紀）までの砂丘の固定期に形成された」と述べている。また「上位クロスナ層」は包含されていた木炭片の¹⁴Cによる測定年代が、955±75y.B.P.と出たことから10世紀後半から11世紀前半に形成されたものと判断している。

角田氏は、さらにこのような2段階のクロスナ層形成が江津砂丘地帯のみに表われた地域的な特殊な現象ではなく、九州の玄海砂丘地帯をはじめとして各地の砂丘地帯でも認められる普遍的なものであることを指摘し、「下位クロスナ層に示される約3,500年前から約2,000年の間、日本列島の砂丘地帯は草木によって覆われ、固定していたことであろう。」と推定している。

角田氏が上記の見解を得るために踏査・実見されたのは、おそらく波子遺跡B地点の砂丘断面であったと思われるが、そこからは、すでに明らかなように、「堀之内式云々」の土器等は検出されてはいない。縄文土器の型式認定の責任はもちろん山崎氏にあるにせよ、このことは波子遺跡研究史初期のことで、いわば山陰地方の縄文土器研究が未開拓の頃のことであって、現段階の分析の

支えになるものでないことは明瞭であろう。しかし角田氏が後段に示された、縄文後期を中心とした時期が砂丘形成の固定期であったとする指摘は、波子遺跡の成立と展開を考察する上で貴重であろう。このことは門脇氏がB地点の縄文土器の特徴として他地域の土器との共通性をあげたことと関連する問題でもある。

iv) 足立克己「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」(『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念事業会編)1987年。波子遺跡の立地条件や縄文時代における時的な位置付け、集落遺跡としての性格が究められる中で、他地域の縄文文化の動向との比較検討が当面するもっとも基本的な課題となってくる。門脇、角田両氏の見解にはこのような課題に対するアプローチがみられたわけであるが、必要なことは、やはり縄文土器の型式学的な比較検討であり、このことが第一義的な作業となる。足立氏の所論はそのような課題と要請に比えるものということができよう。

足立氏は上記論文において、「江津市大平山遺跡」B地点出土土器についてその型式学的な検討を行ない、これらが中部瀬戸内地域を中心とする縄文後期の土器編年における福田Ⅱ式から彦崎Ⅱ式・津雲A式(緑帯文土器)への変遷の流れに位置付けられるものであることを明らかにしている。そして緑帯文土器の基本的な文様パターンは九州の鍾ヶ崎式系土器にあるとし、この段階における西瀬戸内を中心とした地域との密接な関連性の存在に注意を払っている。

第3節 大平山遺跡群としての把握

波子遺跡の研究史を瞥見して知られることは、この遺跡が石見地方はもとより山陰地方の縄文時代の研究にとってきわめて重要な意義を有していることである。その意義をさらに具体的に明らかにしていくことが今後の最大の課題となろう。いくつか気付いた点をあげると①は、縄文中期の段階で「波子式土器」が成立するわけであるが、その型式内容や系譜の検討が遺跡の形成の事情との関連において進められねばならないこと、②には縄文晩期から弥生前期にかけての遺跡の探索の必要性、③は、これまで余り触れられなかった弥生後期以降の遺跡の展開状況の具体的な把握等々がある。こうした諸問題の解明に欠かせない研究課題として砂丘の地理学的・地質学的な検討があるし、同時に大平山一帯の遺跡の所在の探索も並行的に取り組みされる必要がある。すでに示したように大平山の周辺には波子遺跡をはじめとして大平浜遺跡・越峠遺跡の存在が確認されており、さらにいくつかの遺跡が砂丘地帯に埋もれている可能性は大である。これらを有機的に統合させて一体の原始・古代集落群として捉え、その変遷を追究することが求められているといえる。つまり大平山遺跡群として究め、捉えることが必要なのである。

ところでこの大平山一帯は15年戦争時代には浜田歩兵21連隊の演習場として使用されていた。その軍事訓練の様子は多くの市民によって現在も語られているが、砂丘地帯に残された砲弾の破片はさらに有力な証言をわれわれに残している。こうした軍国主義の遺産もまた一種の考古資料として保存されるべきであろう。

このように大平山の砂丘地帯には地域の悠久な歴史が埋もれている。そして各々の歴史の発達段階に応じて特徴的に砂丘が利用されてきたことも想定されるのであるが、その実相を明らかにする諸課題にわれわれは当面しているのである。

(田中義昭・吾郷和宏)

〈参考文献〉

1. 浜田高等学校考古学部編『石見の先史時代及び原始時代概況・波子遺跡遺物の研究』 1944年
2. 山本 清「西山陰の縄文式文化」『島根大学山陰文化研究所紀要』第1号 1961年
3. 山本 清「縄文式文化」『新修島根県史・通史編』1 1968年
4. 矢道正年『島根県の縄文式土器集成1』1974年
5. 江津市誌編纂委員会編『江津市誌』上巻 1960年

第3章 発掘調査

第1節 波子遺跡の調査

1. 調査区の概要

江津市波子町に所在する本遺跡は、大平山東北麓を北に流れる曲川左岸に位置する。1969年頃から行われた砂取業者による採砂によって大平山山麓の地形が改変され、現状では馬蹄形状に残った2ヶ所の採砂跡地がみられる。ここでは、南東側に位置する採砂跡地の曲川沿いの東側砂丘部をA地点とし、山手の西側崖面をB地点とする。このB地点は、山本 清氏の調査報告にいうB地点と符合するものである。われわれの命名によるA地点は南側からⅠ～Ⅵの6トレンチを設け、B地点はⅠトレンチから南にⅡ～Ⅴトレンチ、Ⅰトレンチの北にⅥ・Ⅶトレンチを設定した。また北西に位置する採砂跡地をC地点とし、西から順にⅠ～Ⅳトレンチを設けた。

(1) A地点

A-Ⅰトレンチ 幅約2m、長さ約4mのトレンチとして設定した。表砂の下に黒色砂層（標高約4.7m）を検出したが、遺物の有無は確認できなかった。

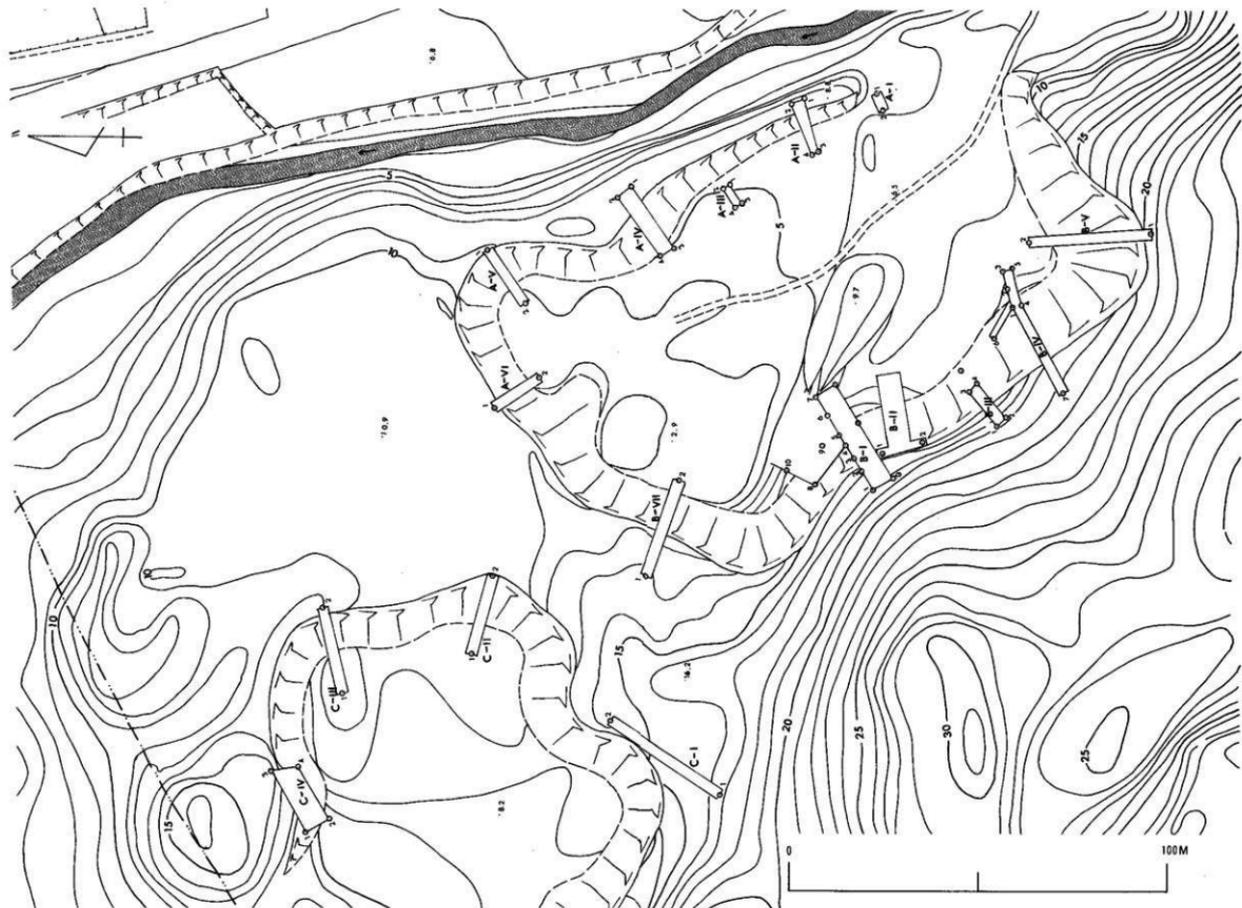
A-Ⅱトレンチ 崖面に設定したトレンチで、幅約3m、長さ約14.5mである。表砂の下に曲川左岸に向かって北東方向に緩やかに傾斜する黒色砂層面（標高5.3m～4.0m）を検出した。上面から数片の弥生土器片・土師器片が出土している。

A-Ⅲトレンチ 崖面設定のトレンチで、幅約2m、長さ約6m。A-Ⅰトレンチと同様に表砂の下に曲川左岸に向かって北東方向に緩やかに傾斜する黒色砂層面（標高4.75m～3.75m）を検出した。遺物は上面から土師器が数点出土した。

A-Ⅳトレンチ 崖面設定の幅約4m、長さ約20mのトレンチ。トレンチ西端に採砂の際に削り取られたと思われる黒色砂層の残骸を確認した。上面は標高4.75m～4.25mで、曲川に向かって東方向に傾斜する。遺物の存在は確認されなかった。

A-Ⅴトレンチ 幅約4m、長さ約17.5mのトレンチを崖面に入れたが、表砂が厚く、黒色砂層の有無、遺物の有無とも確認できなかった。

A-Ⅵトレンチ 本トレンチは幅約4m、長さ約15m、南向きの崖面に設定したが、表砂が厚く、



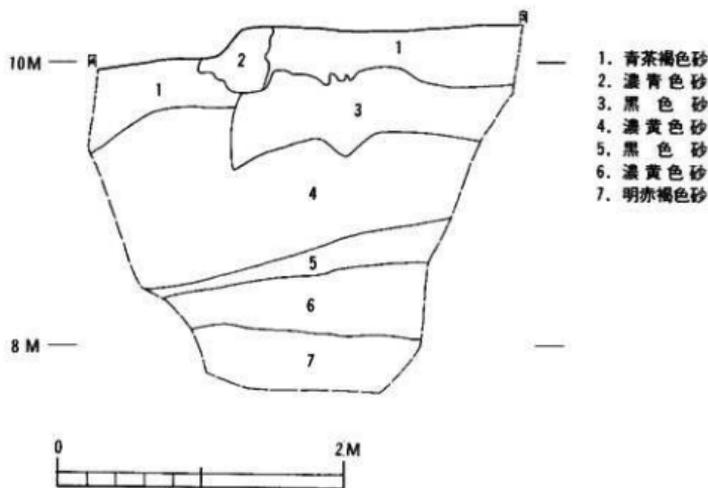
第5図 波子遺跡周辺地形図・トレンチ配置図

黒色砂層の存在、遺物の有無とも確認できなかった。

(2) B地点

B-I トレンチ 東向きに崖面下に瓢箪状に残る土手の基部付近では、表面が著しく風化した縄文土器の細片が多数採集された。そこで、崖面上から任意に幅約6m、長さ約30mのトレンチを設定した。崖面上部の南壁から観察される基本的な層序は、最上層から順に、表砂層-黒色砂層-褐色砂層-黒色・黄色砂層となっており、注目される黒色砂層は第2層として確認された。この黒色砂層は土師器を包含する厚さ20~40cmの層で、東側斜面下に向かって傾斜している。最下層の黒色・黄色砂層は、黄色砂をベースにして黒色砂が部分的に広がり、厚さ1.0~1.5m、上面は標高14.8mの水平な層であるが、そこから東側の崖面下に向かってはやや急な斜面となっている。上面には縄文中期の土器片、スクレイパー、磨石、石皿などの石器類や礫等が多数出土した。土器の中には「波子式」らしき底部が含まれている。

B-VI トレンチ B-I トレンチの北側に隣接するトレンチで、B-I トレンチでみられた縄文土器出土面の広がり状況を確認する目的で設定した。調査の結果、縄文土器片が出土する黒色・黄色砂層面は、B-I-3 杭あたりを最高部(標高14.2m)として北側に緩やかに、あるいは東側の崖面下に向かってはやや急な斜面となっており、崖面下で小山になった岩山でせき止められている



第6図 波子遺跡B-III トレンチ崖面土層断面図

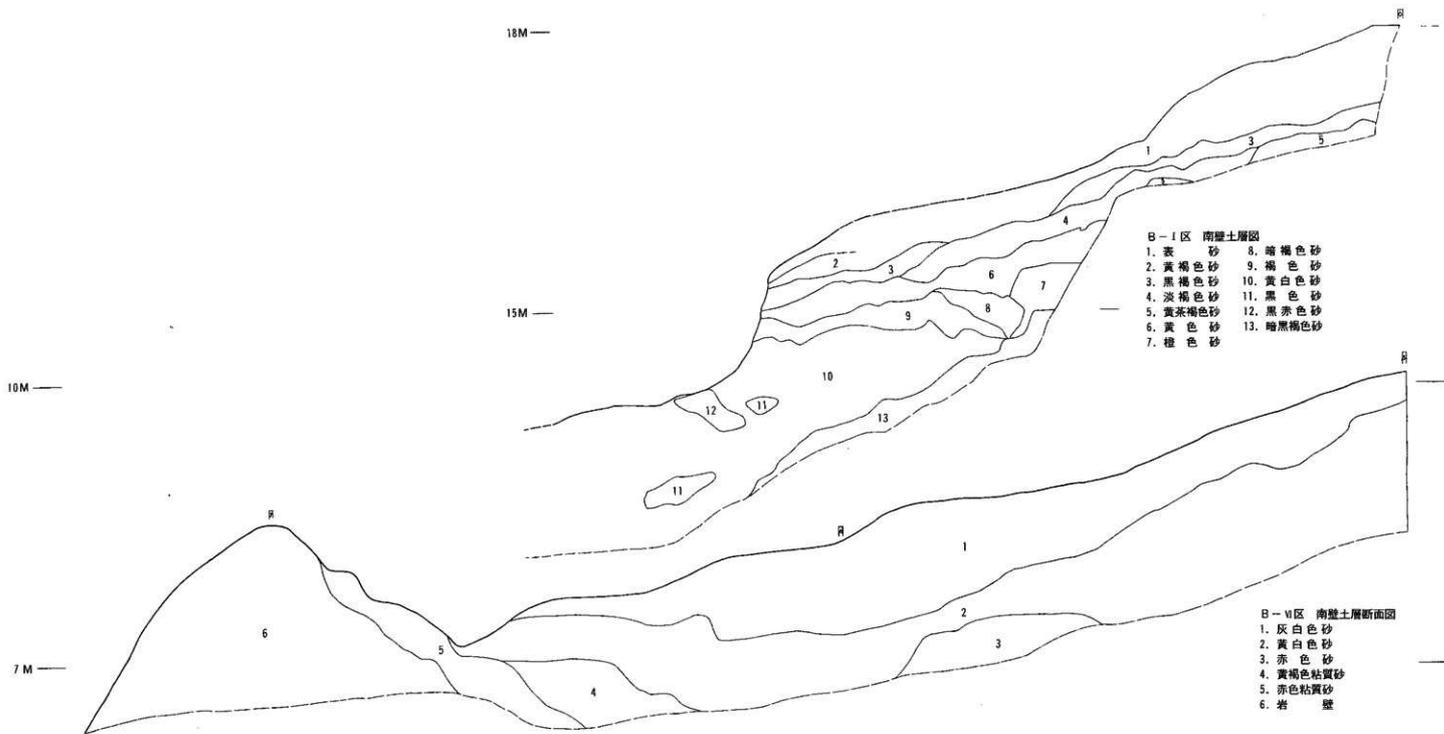
ことがわかった。遺物としてはB-Iトレンチと同様に縄文土器の細片や石器類が多数出土したが、B-Iトレンチにはみられなかったものとして石鏃、黒曜石の剝片と弥生土器（変形土器口縁部）1片が出土している。このように、B-IトレンチからB-Vトレンチにかけて散布していた縄文土器はいずれも径数cm程度の細片であり、表面の風化も激しいことから、山頂から流れ落ちてきたものと考えられている。そして、崖面下の瓢箪状に残っている小山によって砂がせき止められているため、B-Iトレンチの崖面下では縄文土器の細片が多数表採される状況にあったと思われる。

B-IIトレンチ B-Iトレンチの南側に隣接するトレンチで、南北約10m東西約12mのT字形のトレンチを崖面に設定した。崖面に沿った南北セクションの観察から確認できる基本的な層序は、表砂層-黒色砂層-褐色砂層-黄色砂層であり、B-Iトレンチの南壁セクションと対応する地層構成である。黒色砂層は厚さ40~60cmの土師器を包含する層で、B-Iトレンチの南壁セクションで確認した上層の黒色砂層に対応するものである。その上面は南へ下る緩やかな傾斜ラインを示している（標高15m~14m）。また黄色砂層上面はB-I、B-Vトレンチの遺物出土面に対応すると思われるが、ここでは遺物は確認されなかった。

B-IIIトレンチ 幅約3m、長さ約17mのトレンチをB-IIトレンチとB-IVトレンチの中間に設定したところ、間に流砂層（約17m）を挟んで上下2段に黒色砂層が検出された。崖面上部の標高17mのところに見られる黒色砂層は、南北にはほぼ水平な10cm前後の層で、遺物の存在は確認されなかった。下段の崖面セクションについて見ると、層序は上から黒茶褐色砂層（1層）・濃青色砂層（2層）-黒色砂層（3層）-濃黄色砂層（4層）-黒色砂層（5層）-濃黄色砂層（6層）-明赤褐色砂層（7層）となっている。1~3層は土師器を包含する厚さ40~80cmの層で、その上面は南に向かって緩やかに傾斜しており、B-IVトレンチの崖面下で確認された黒色砂層面につながるものと考えられる。また、4~6層は縄文後期の土器を包含する層で、中津式や福田KⅡ式に比定される磨消縄文土器が多数確認された。

B-IVトレンチ 崖面の上から下に幅約4m、長さ約37mのトレンチを設定した。崖面では流砂層が厚く堆積しており黒色砂層は確認されなかったが、崖面下に東方に緩やかに傾斜し、土師器の散布する黒色砂層面（標高8.7m~6.9m）が検出された。この面はB-IIIトレンチ及びA地点で確認された土師器を出土する黒色砂層面に対応するものと考えられる。遺構は確認できなかったが、直径10cm程度の枕跡のようなピットが検出された。またこの層は堅くしまった不透水層となって上面を湧水が絶えず流れる状態になっており、木片が遺存していた。その外の遺物としては黒曜石の剝片1片が出土している。

B-Vトレンチ B-IVトレンチの南側の崖面に、幅約4m、長さ約33mのトレンチを入れたが黒色砂層の存在、遺物の有無とも確認できなかった。



第7図 波子遺跡B-Iトレンチ・B-VIトレンチ南壁土層断面図

B-Vトレンチ B-Vトレンチの北東部の南向き崖面に、幅約4m、長さ約27mのトレンチを入れたが、黒色砂層、遺物とも認められなかった。

(3) C地点

C-Iトレンチ 幅約4m、長さ約27mのトレンチを崖面上に設定した。トレンチ南側に北方向へ急な傾斜をする黒色砂層(標高14m~11.5m)を検出した。遺物の有無は確認されなかった。

C-IIトレンチ 幅約4m、長さ約22mのトレンチを崖面に入れたが、黒色砂層、遺物とも確認できなかった。

C-IIIトレンチ 幅約4m、長さ約23mのトレンチを崖面に入れたが、黒色砂層、遺物とも認められなかった。

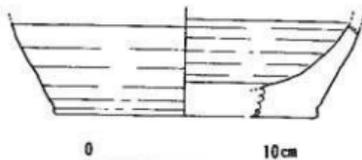
C-IVトレンチ 南北約7m、東西約12mのトレンチを崖面に入れたが、黒色砂層、遺物とも認められなかった。

(吾郷和宏)

2. 出土遺物

(1) A地点出土遺物(第8図)

A地点からは弥生土器、土師器の細片と陶器片が出土した。図示したの陶器片は器種は不明だが、平底の底部である。無軸で淡赤褐色を呈する。おそらく近世に属するものであろう。(松尾晴司)



第8図 波子遺跡A地点出土陶器実測図

(2) B地点出土遺物

a. 縄文土器

今回の調査で得られた縄文土器は、表採品を含めて約600片ほどである。出土範囲はB地点のはほぼ全域にわたっている。ここでは、出土土器片の中で型式の特徴を伺うことができる126点について説明を加えることとする。

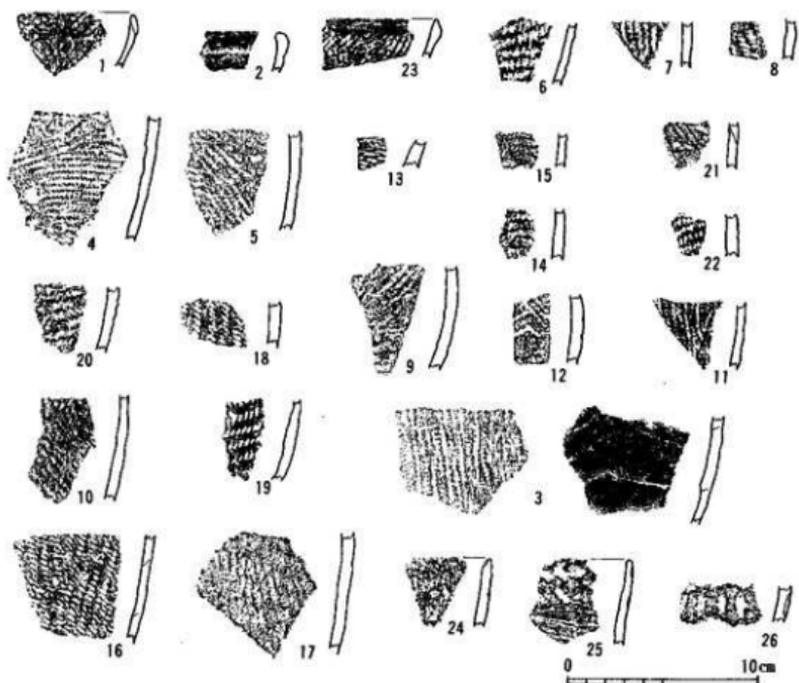
分類 土器の文様の有無と施文・整形技法に視点を置き、分類を試みる。A類は縄文を、B類は刺突文を、C類は沈線文を、D類は磨消縄文を、E類は条痕文をそれぞれ有するものとし、無文土器をF類とする。これらを内面調整によってさらに細分する。底部に関しては、基本的に内面調整によっては分類しない。

なお、一覧表に出土地点と層位を示した。

A類 縄文を主体とする土器

a) 縄文地で口縁部の外面に張り付け凸帯を有するものである(第9図 1・2)。

器種は深鉢、ほぼ直口する口縁で、器形は胴部が若干張るような形態であろう。山本 清氏のい



第9図 波子遺跡B地点出土縄文土器実測図(1) (A類1~23, B類24~26)

う波子式に相当する¹⁾。1は凸帯を張り付けた後凸帯表面から全体に縄文が施されたものである。2は凸帯と縄文地を沈線で区画したものである。両者とも黄赤茶色を呈し、胎土は密であるが、風化が著しく、細部については不明である。

b) 内面にナデを施しているもの(第8図 3~13)

9~13は、比較的内外とも丁寧なつくりで、外面をナデ調整した後に縄文を施している。3~8は、輪積痕を残すなど、つくりがやや粗いものである。13が灰黒色、9が灰色を呈する以外は全体的に黄褐色を呈するものが多い。

c) 内面に条痕を施しているもの(第9図 14~19)

14, 15は斜め方向に条痕を施している。16は斜条痕と横方向の条痕が交互に施されている。17は外面が風化しているが、比較的丁寧なつくりで、内面は斜・横方向の条痕施行後ナデ調整を施し、黒色を呈する。18・19は風化が著しく、細部は不明である。色調は15が灰黒色、17が灰色を呈する

以外黄褐色のものが多く、16・17以外は胎土は碌である。

d) 内面調整が不明なもの(第9図 20~23)

20~22は風化が著しく、内面調整が不明なものである。23は直口する口縁で、口縁端部は丸く仕上げられている。胎土は密で黄赤褐色を呈する。

B類 刺突文を主体とする土器

a) 内面に磨きを施しているもの(第8図 24)

24は直口する口縁で、端部は丸く仕上げられている。外面には円形の刺突が施されている。

b) 内面にナデを施しているもの(第8図 25)

25は直口する口縁で、端部は平坦に仕上げられている。外面には口縁に沿って2列の太い刺突が施され、その下には数条の細かい沈線が見られる。

c) 内面調整が不明なもの(第8図 26)

26は外面に縦方向の長楕円形刺突文が施されている。口縁近くの破片と思われる。

B類は全体的に胎土が碌で、色調は26が赤褐色である以外灰色を呈する。

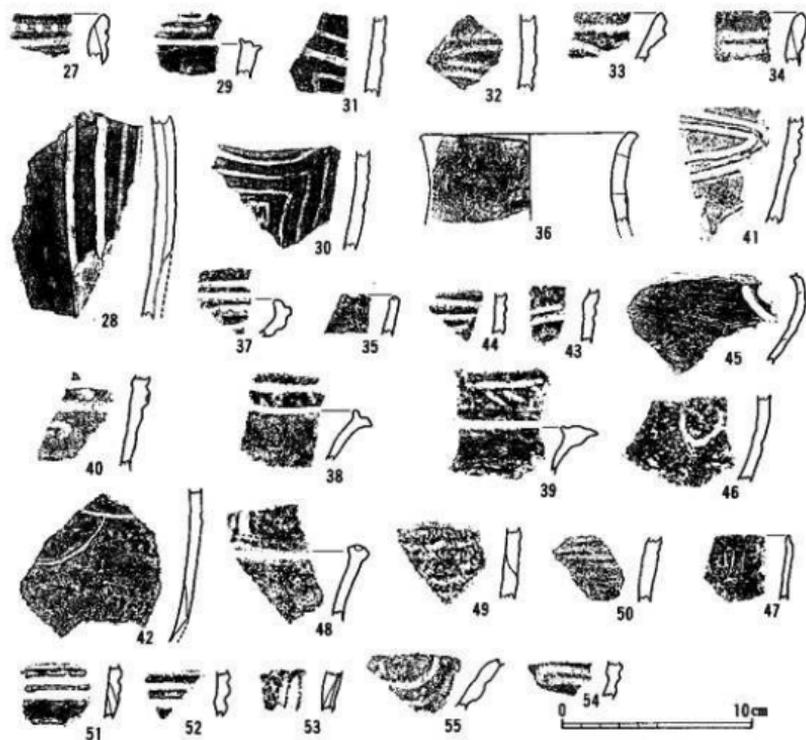
C類 沈線文を主文とする土器

a) 内面に磨きを施しているもの(第10図 27~32)

器種は浅鉢(27)と深鉢(28~32)である。27は口縁で、端部はやや丸く仕上げられている。外面には口縁に沿って2条の平行沈線がめぐらされており、上の沈線中に円形の刺突文が施されている。28は肩もしくは胴部の破片である。太い貼り付けの隆帯と、凹線が数本施されている。29は肥厚した口縁で端部に沈線が施されている。30~31は胴部方で、数条の沈線による区画文が見られる。32は胴部の破片であり、沈線がめぐらされている。色調は27が灰色、28・31が赤褐色を呈する以外全体的には黄褐色で、胎土は密である。

b) 内面にナデを施しているもの(第10図 33~44)

器種は浅鉢(33・34・37)と深鉢(36・38~42)である。33はやや外反する口縁で、端部はやや丸く仕上げられている。外面には口縁に沿って1条の沈線がめぐっており、凸帯を挟んで数条の沈線がめぐらされていたと思われる。34は口縁で、端部は丸く仕上げられて、やや外反する。外面には口縁に沿って2条の平行沈線がめぐらされている。35は口縁部で、内外面とも数条を施した後ナデている。口縁端部には短い沈線が施されている。36はやや外反味の肥厚する口縁部で、鉤状をなす沈線の端が見られる。37は口縁端部が逆「く」字状に肥厚する口縁である。端部には1条の太い沈線がめぐり、口縁直下にも2条以上の太い沈線がめぐらされている。38は肥厚して、やや外反する口縁で、外面はナデ調整を施している。口縁端部には1条の沈線がめぐっている。39はかなり肥厚して外反する口縁である。端部には1条の沈線と刻み目が見られる。40~42は胴部の破片で、40は



第10図 波子遺跡B地点出土縄文土器実測図(2) (C類27~55)

数条の沈線がめぐらされ、その端部は鉤状になるものが見られる。41は併走する2本のやや太目の沈線によって曲線文様が構成されたものである。42は外面が条痕地で、細い沈線を施す。43は2条の平行沈線を、44は数条の沈線をそれぞれめぐらしたものである。

C類bは全体的に黄褐色・赤褐色の色調で、34・36・38・40は胎土が密で、精緻なつくりであり、半精製もしくは精製土器と考えられる類である。

c) 内面に条痕を施しているもの (第10図 45・46)

器種は浅鉢(45)と深鉢(46)である。45は胴部で、外面にも条痕を施し、1条の太い沈線がめぐらされており、この下部に接して2条の湾曲する沈線を施して文様が構成されている。46はU字状の沈線が施されている。また、内外ともかなり風化しており、細部は不明であるが外面には縄文が施

されている可能性がある。

d) 内面にケズリを施しているもの(第10図 47)

47は直口する口縁で、端部はやや丸く仕上げられている。外面には条痕調整が施され、細く短い沈線文が数条施されている。

e) 内面調整が不明なもの(第10図 48~55)

48は肥厚し、やや外反する口縁で、端部に沈線が観察できる。49~53は外面に数条の平行沈線が施されている。54は口縁部に近く、数条の沈線がめぐっており、その端部が鉤状になっているものも見られる。55は胴部の破片で、数条の沈線が渦巻状に施されている。

全体的にC類c・d・eの胎土はやや疎であり、色調は黄・赤褐色に近いが、55は胎土も比較的密で、淡黒褐色を呈する。

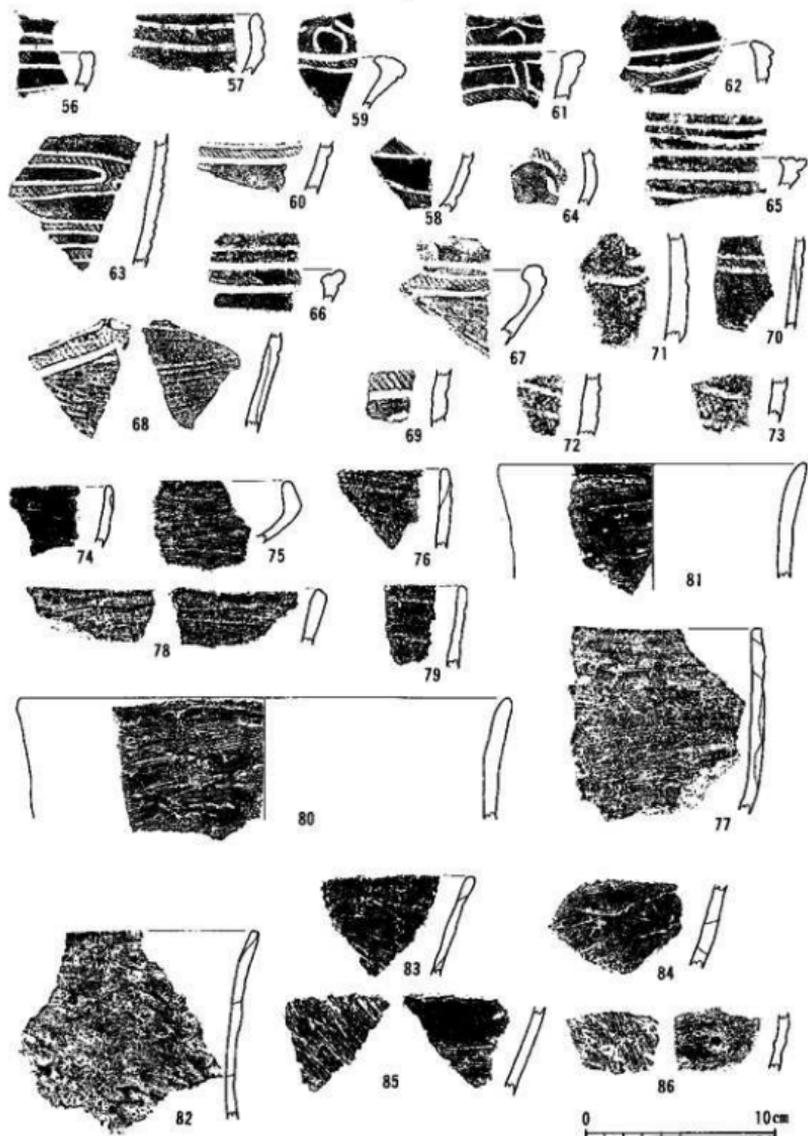
D類 磨消縄文を主文とする土器

a) 内面に磨きを施しているもの(第11図 56~64)

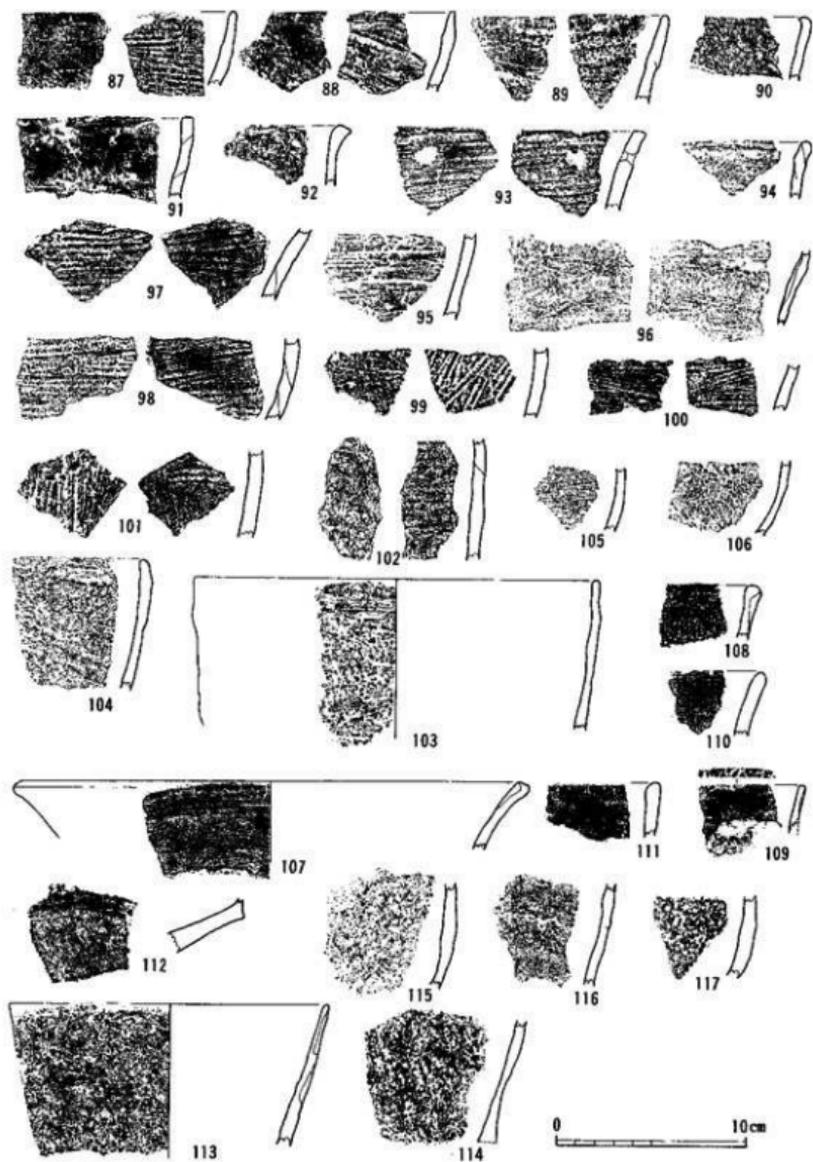
器種は浅鉢(56~59)と深鉢(60~63)である。56はやや肥厚した口縁で、口縁端部から下にかけて磨消縄文が施されている。57はゆるく内湾する口縁で、端部は丸く仕上げられている。口縁に沿った2本の沈線文によって幅7mmの磨消縄文帯が区画されている。58は胴部の破片である。59は肥厚外反する口縁部で、端部に沈線と磨消縄文帯が施されている。60は胴部の破片で沈線と幅4mmの磨消縄文帯をもつ。61は肥厚して外反する口縁部で、端部に沈線によって磨消縄文帯が区画されている。また、口縁下にも磨消縄文帯が区画されている。62は肥厚して、やや内湾する口縁部で波状部をもつ。口縁に沿った沈線によって幅4mm前後の磨消縄文帯が区画されている。63は胴部の破片で、沈線と幅6mm前後の磨消縄文帯をもつ。沈線内及び磨消縄文帯に赤色顔料が塗られている。64は胴部の破片で、湾曲した沈線と磨消縄文帯をもつが、風化が著しくはっきりしない。色調は、56・60・64が黄褐色を呈する他は、黒色に近く、胎土も密である。いずれの土器も精緻なつくりで精製土器と考えられる類である。

b) 内面にナデを施しているもの(第11図 65~69)

器種は深鉢である。65は肥厚して、やや外反する口縁部で、端部に2条の沈線がめぐっている。風化が著しく磨消縄文帯のはっきりしない。66は肥厚して、外反する口縁部で、端部に1条の沈線をもち、口縁に沿っても1条の沈線と磨消縄文帯が観察できる。67は肥厚し、やや内湾する口縁部で波状部をもつ。外面は条痕を地文とし、沈線と幅6mm前後の磨消縄文帯が施されている。内面は条痕調整を施した後ナデている。68は胴部の破片で67と同様のものであり、同一個体と考えられる。69は胴部付近の破片で幅10mmの磨消縄文帯をもつ。65・66は赤褐色で、67・68は淡黄褐色の色調である。胎土は全体的に密であり、66は比較的丁寧なつくりである。



第11圖 波子遺跡B地点出土縄文土器実測図(3) (D類56~73, E類74~86)



第12圖 波子遺跡B地点出土縄文土器実測圖(4) (E類87~106, F類107~117)

c) 内面調整が不明なもの(第11図 70~73)

70は2条の平行沈線によって幅4mmの磨消縄文帯が区画されている。71は太い沈線によって磨消縄文帯が区画されている。72は沈線によって幅10mmの磨消縄文帯が区画されている。73は沈線と幅10mm前後の磨消縄文帯をもつ。胎土はやや疎で、73が黄褐色を呈する以外は青灰色である。いずれの土器片も風化が著しく細部は不明である。

E類 条痕を主体とする土器

a) 内面に磨きを施しているもの(第11図 74)

74は直口する口縁部で、端部は丸く仕上げられている。外面は条痕調整を施した後粗い磨きを施している。内面も磨かれ、黒色を呈している。

b) 内面にナデを施しているもの(第11図 75~86)

器種は浅鉢(75)と深鉢(76~86)である。75は逆「く」字状に屈曲する口縁で、内外面も条痕調整を施した後に軽くナデている。76~79はほぼ直口する口縁で、76は口縁端部は平坦に、77~79は丸く仕上げられている。80~83はやや外反する口縁で、全て端部はやや平坦に仕上げられている。80~81は外面に条痕調整を施した後軽くナデている。82~83は外面に条痕を残したままである。84~86は胴部の破片である。84は外面に条痕調整を施し、内面はナデと条痕の两部分がある。86は条痕調整を施した後ナデている。

c) 内面に条痕を施しているもの(第12図 87~102)

器種は深鉢である。87~90はほぼ直口する口縁部である。87は口縁端部がやや平坦に仕上げられている。内・外面に条痕調整を施した後磨いている。88は口縁端部がやや丸く仕上げられている。89~91は端部を平坦に仕上げている。92は肥厚してやや外反する口縁部である。93はやや外反する口縁部で、端部は平坦に仕上げている。内面は条痕調整を施した後ナデている。94は外反する口縁部で、端部をやや丸く仕上げている。95~102は胴部の破片である。95~97は外面に条痕調整を施しているのみである。98・99は外面に条痕調整を施した後ナデている。100は内外面ともに条痕調整を施した後ナデ、内面は条痕とナデの两部分がある。102は風化が著しく細部は不明である。

d) 内面にケズリを施しているもの(第12図 103)

103は器種が深鉢で、ほぼ直口する口縁部である。端部はやや平坦に仕上げられている。

e) 内面調整が不明なもの(第12図 104~106)

104は器種が深鉢で、ほぼ直口する口縁部である。端部はやや丸く仕上げられている。外面は条痕調整を施した後ナデている。105は胴部の破片で外面に細かい条痕調整が施されている。106は胴部の破片で、内外面とも風化が著しい。

E類の土器は全体的に胎土が粗く、黄褐色の色調である。その中でも、74・86は胎土は密で、74・

85は赤褐色の色調を呈する。

F類 無文土器

a) 内面に磨きを施しているもの(第12図 107~112)

器種は浅鉢(112)と深鉢(107~111)である。107はやや肥厚して外反する口縁部である。端部は平坦に仕上げられている。108は肥厚してやや外反する口縁部である。端部はやや丸く仕上げられている。109はやや外反する口縁部で、端部は平坦に仕上げられている。端部には縄文らしいものが施されているが、原体は不明である。107は外面、108・109は内、外面とも黒色研磨されている。110はやや外反する口縁部で、端部は丸く仕上げられている。112は口縁が軽く外反する浅鉢の底部近くの破片と思われる。全体的に黒褐色を呈するが、107は赤褐色、112は黄灰色を呈する。胎土は密であり、いずれも精緻なつくりで半精製もしくは精製土器と考えられる類である。

b) 内面にナデを施しているもの(第12図 113~114)

器種は深鉢である。113はやや外に開く口縁部で、端部は丸く仕上げられている。114は底部付近の破片である。外面は特に風化が著しく詳細は不明であるが、縄文が施されている可能性がある。

c) 内面に条痕を施しているもの(第12図 115)

115は鉢の胴部の破片である。風化が著しく、調整の詳細は不明である。

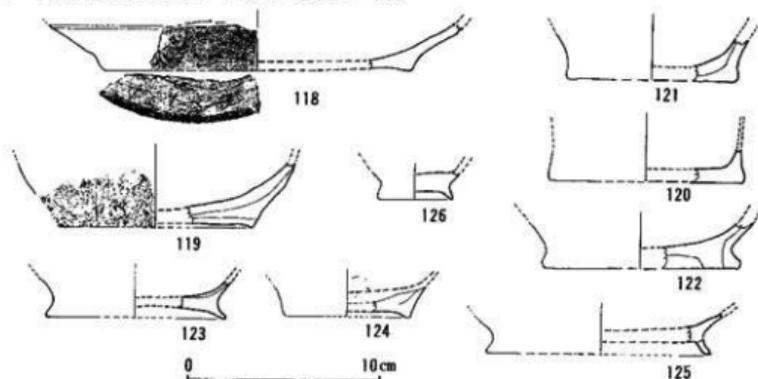
d) 内面調整が不明なもの(第12図 116・117)

116・117とも胴部の破片である。両者とも風化が著しく、調整の細部は不明である。

F類b~dは砂粒を多く含み、やや疎で、色調は赤褐色を呈する。

底部

a) 内面に磨きを施しているもの(第13図 118)



第13図 波子遺跡B地点出土縄文土器実測図(5) (底部)

118の器種は浅鉢である。118は内・外面とも黒色研磨しており、胎土は密である。外面に1条の沈線が見られる。

b) 上げ底・平底のもの(第13図 119~126)

119~122が平底で、123~126が上げ底である。外面調整がナデているもの、119~123と不明なもの124~126である。(新海正博)

第1表 波子遺跡B地点出土縄文土器一覧表

類	遺番号	押番号	図番号	版番号	出土地点	山土11付 (1987)	(色調) (胎土)				
							備考	(cm)			
A - a	1	7	7		B-V	5.4	密	黄赤茶色			
	2	"	"	"	B-I 表採	4.25					
A - b	3	"	"	"	B-I No25	4.23	密	灰黒色			
	4	"	"	"	B-II No 9	4.28					
	5	"	"	"	B-I No22	4.23					
	6	"	"	"	B-V	5.2			黄褐色系		
	7	"	"	"	B-I No20	4.23					
	8	"	"	"	1-d 表採	4.23					
	9	"	"	"	B-I No20	4.23			灰色		
	10	"	"	"	B-J No20	4.23					
	11	"	"	"	B-I	4.23			黄褐色系		
	12	"	"	"	B-I 表採	4.23					
	13	"	"	"	B-II	4.23			灰黒色		
	A - c	14	"	"	"	B-J No20			4.23	密	黄褐色系
		15	"	"	"	B-I No20			4.23		
16		"	"	"	B-V No46	5.4					
17		"	"	"	B-II No 9	4.28					
18		"	"	"	B-V 4層	4.28					
19		"	"	"	B-V No34 9層	5.6					
A - d	20	"	"	"	B-V 9層	4.23	密	黄赤褐色系			
	21	"	"	"	B-I 表採	4.25					
	22	"	"	"	B-I 表採	5.2					
	23	"	"	"	B-V	4.23					
B - a	24	"	"	"	B-I 表採	4.23	密	灰色			
B - b	25	"	"	"	B-V 表採	4.27	密	灰色			
B - c	26	"	"	"	B-V 表採	4.27	密	赤褐色			
C - a	27	8	8		B-V	5.4	密	灰色			
	28	"	"	"	B-II	5.4					
	29	"	"	"	B-II	5.4					
	30	"	"	"	B-II	5.4			黄褐色系		
	31	"	"	"	B-II	5.4					
	32	"	"	"	B-I 表採	4.23			密	赤褐色	
C - b	33	"	"	"	B-V	5.4	密	褐色~赤褐色系			
	34	"	"	"	B-I 表採	4.25					
	35	"	"	"	B-II	5.4					
	36	"	"	"	B-V	5.4					
	37	"	"	"	B-I 表採	4.25					
	38	"	9		B-V No40 9層	5.6					
	39	"	"	"	B-V 流砂層	4.27					
	40	"	8		B-V No69 13層	5.6					
	41	"	"	"	B-II	5.6					
	42	"	"	"	B-II	5.4					
	43	"	"	"	B-V No70	5.6					
	44	"	"	"	B-V	5.4					

類	遺物 番号	挿図 番号	図 番号	版 号	出土地点	出土日付 (1987)	(色调) (胎土)	
							備考 (cm)	
C - c	45	8	8	B-II	4層	5.6) 赤茶色	
	46	"	9	B-VI	No11	5.4		
C - d	47	"	"	B-II		5.4	赤茶色	
C - e	48	"	"	B-VI	No65 10層	5.6) 黄褐色 ~ 赤褐色系	
	49	"	"	B-VI		5.4		
	50	"	"	B-VI	表採	4.27		
	51	"	"	B-I	表採	4.25		
	52	"	"	B-I	表採	4.25		
	53	"	"	B-I	表採	4.23		
	54	"	"	B-I	表採	4.25		
55	"	"	B-VI	表採	4.27	やや硬、淡黄褐色		
D - a	56	9	10	B-II	4~6層	5.6	密、黄褐色	
	57	"	"	B-VI	9層	4.28	密)	
	58	"	"	B-II	4~6層	5.6	密) 黒褐(黒)色	
	59	"	"	B-II	4~6層		密)	
	60	"	"	B-II		5.6	密、黄褐色	
	61	"	"	B-II	4~6層		密)	
	62	"	"	B-II	4~6層		密) 黒褐(黒)色	
	63	"	"	B-II		5.6	密)	
	64	"	"	B-I	表採	4.25	密、黄褐色	
D - b	65	"	"	B-VI	No34 9層	5.6	密)	
	66	"	"	B-VI	No39 9層	5.6	密) 赤褐色	
	67	"	"	B-II		5.6	密)	
	68	"	"	B-II	4~6層	5.6	密) 淡黄褐色	
	69	"	"	B-I	表採	4.25	密)	
D - c	70	"	"	B-I	表採	4.25	やや硬	
	71	"	"	B-I	表採	4.28	やや硬、青灰色	
	72	"	"	B-I	表採	4.23	やや硬)	
	73	"	"	B-I	表採	4.25	やや硬、黄褐色	
E - a	74	"	11	B-II		5.4	密、赤褐色	
E - b	75	"	"	B-II		5.4) 黄褐色系	
	76	"	"	B-II		5.4		
	77	"	"	B-II		5.6		
	78	"	"	B-II		5.4		
	79	"	"	B-II		5.4		
	80	"	"	B-II	10層	4.24		口径24.8、
	81	"	12	B-II	13層	4.24		口径16.2、黄褐色系
	82	"	11	B-II	4~6層	5.6) 黄褐色系
	83	"	"	B-II	4~6層	5.6) 黄褐色系
	84	"	"	B-II	4~6層	5.6) 赤褐色
	85	"	12	B-II	4~6層	5.6) 赤褐色
	86	"	"	B-VI	No28 9層	5.4		密、黄褐色
E - c	87	10	"	B-VI		5.2) 黄褐色系	
	88	"	"	B-II	4~6層			
	89	"	"	B-II	4~6層	5.6		
	90	"	"	B-II		5.4		
	91	"	"	B-II	4~6層			
	92	"	"	B-II		5.4		
	93	"	"	B-II		5.4		
	94	"	"	B-II		5.4		
	95	"	"	B-II	4~6層	5.6		
	96	"	"	B-II	4~6層	5.6		
	97	"	"	B-II		5.4		
	98	"	13	B-II		5.4		
	99	"	"	B-I	表採	4.27		
	100	"	"	B-II	4~6層	5.6		
	101	"	"	B-II		5.4		

類	遺物 番号	挿 番 号	図 号	図 号	版 号	出 土 地 点	出土日付 (1987)	(色調) (胎土)		
								備 考 (cm)		
E - c	102	10	13	B-Ⅱ	表探		4.27	黄褐色系		
E - d	103	"	"	B-Ⅱ			5.4	口径21.0, 黄褐色		
E - e	104	"	"	B-Ⅱ	No65		5.4	黄褐色系		
	106	"	"	B-Ⅱ	No32		5.4			
	106	"	"	B-Ⅱ	No69 13層		5.4			
F - a	107	"	"	B-Ⅱ			5.4	口径26.0, 密	黒編(黒)色	
	108	"	"	B-Ⅱ			5.4	密		
	109	"	"	B-Ⅱ			?	密		
	110	"	"	B-Ⅱ			5.4	密, 黄黒褐色		
	111	"	"	B-Ⅱ			5.4	密, 赤褐色		
F - b	112	"	"	B-Ⅱ	No109		4.29	密, 黄褐色		
	113	"	"	B-Ⅱ	No22		5.4	口径16.6	赤茶色～赤褐色系	
	114	"	"	B-Ⅱ	No106		5.4			
F - c	115	"	14	B-Ⅱ	No 3		5.4	赤茶色		
F - d	116	"	"	?				赤茶色or		
	117	"	"	B-Ⅱ			5.4	赤褐色系		
底部 - a	118	11	"	B-Ⅱ	表探		5.6	底径16.0, 密黒編(黒)色		
底部 - b	119	"	"	B-Ⅱ	No73		5.4	底径10.0	赤茶色系	
	120	"	"	B-Ⅱ	No109		5.4	底径10.0		
	121	"	"	B-Ⅱ			5.4	底径 9.8		
	122	"	"	B-Ⅱ	4～6層		5.6	底径10.0, 黄白色		
	123	"	"	B-Ⅱ	9層		4.28	底径 9.4		
	124	"	"	B-Ⅱ	No 4		5.4	底径 5.4	赤茶色系	
	125	"	"	B-Ⅱ	表探		4.27	底径10.6		
	126	"	"	B-Ⅱ	No 9		4.23	底径 4.0, 黄赤色		

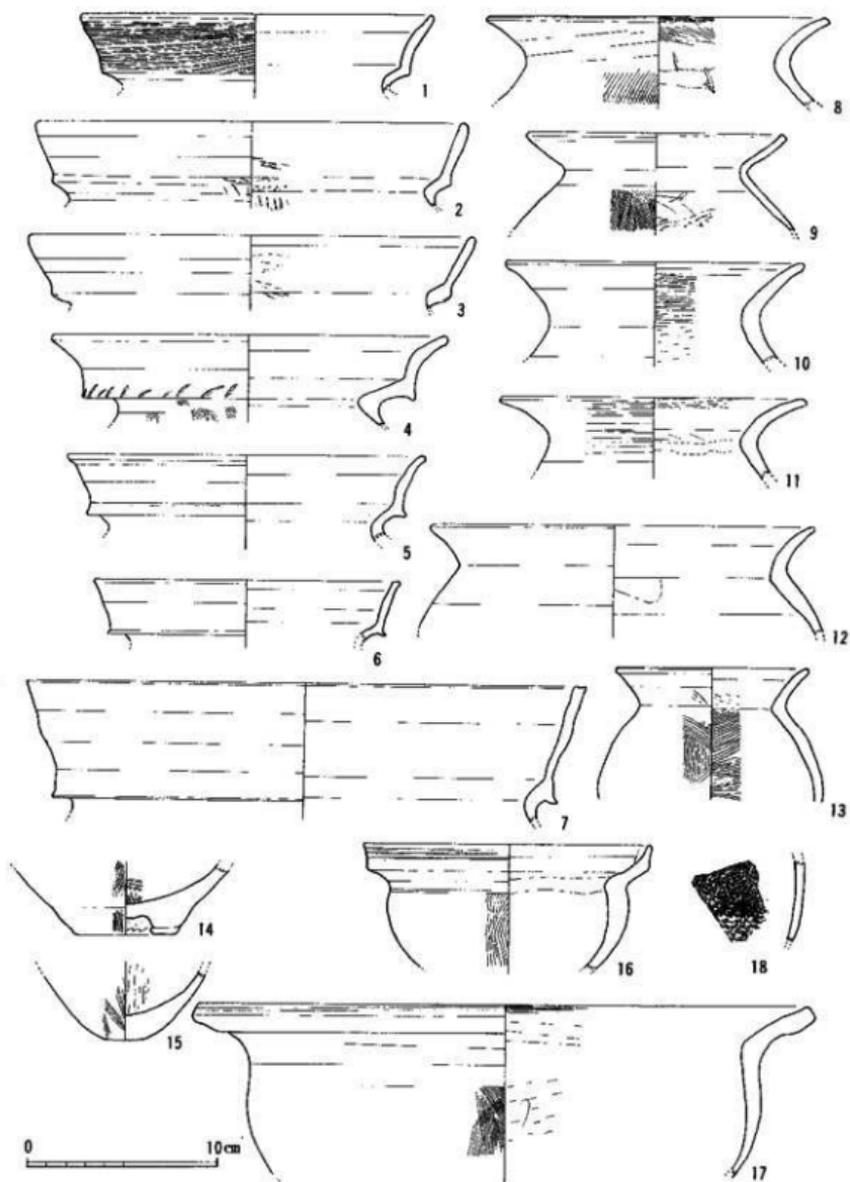
b. 弥生土器・土師器 (第14図, 第15図)

B地点では、弥生土器・土師器は主にB-Ⅱ, B-Ⅲ, B-Ⅳトレンチで出土した。須恵器は風化した小片のみで、形状が判明するものは、ほとんど出土していない。

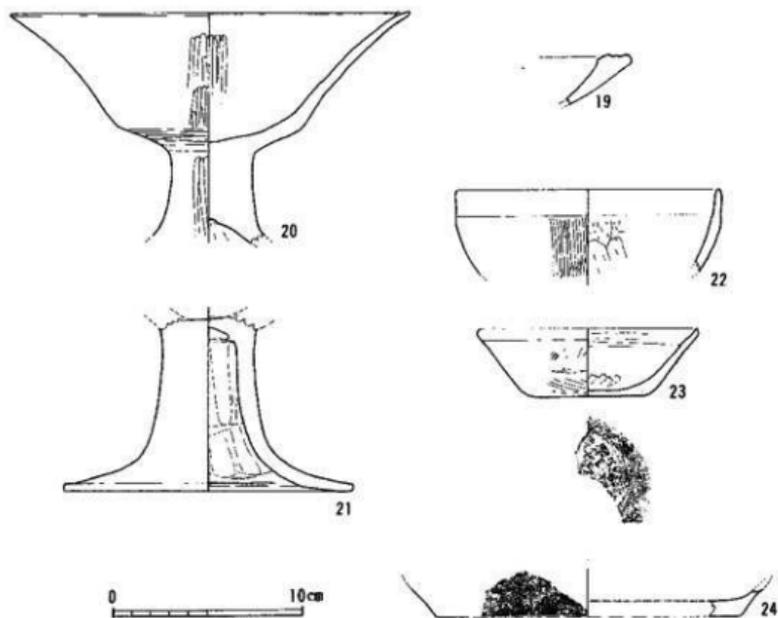
1～7は複合口縁の壺・甕である。1は口縁部が外反し、外面に横方向の平行沈線文が施されている。2・3は口縁部が外傾し、その下端が外方にやや突出している。内面はヘラ削りを施し、外面はヨコナデである。4は、口縁部がつよく外反して広がり、下端部がやや下方に突出する。口縁下部外面には斜方向に刷毛状工具による文様が施され、頸部以下の外面に刷毛目がみられる。5は口縁部が外反し、下端が外方に突出する。口縁上部部に二枚貝の貝殻を用いたと思われる横方向の沈線文がみられ、後に、内外面ともヨコナデを施す。

6は、口縁部はやや外反して立ちあがり、口縁端部に平坦面を呈して、下端部が下方に突出している。内外面ともヨコナデを施す。7は、口径29.2cmと当地点の出土土師器の中では比較的大型で、口縁部は外傾して立ちあがり、下端部が下方に外反して突出し、口縁端部に凹みがみられる。

8～13は単純口縁の甕で、口縁が頸部から外反して広がるものである。8は口縁部内面と頸部以下の外面に刷毛目が施されている。9は口縁端部はやや内湾する。口縁部内外面にヨコナデを施し、頸部以下内面は削り、外面は肩部以下に刷毛目がみられる。10は口縁内面にヘラミガキを施す。11は外面に横方向のヘラミガキを施す。12は内外面ともヨコナデである。13は頸部以下に不定方向の



第14图 波子遺跡B地点出土弥生土器・土師器実測図(1)



第15図 波子遺跡B地点出土弥生土器・土師器実測図(2)

刷毛目を有する。

14・15は底部である。14は粘土紐を輪状に貼り付け、平底に調整している。内面は不定方向の刷毛目、外面にも一部に刷毛目がみられる。なお底面には靱痕が認められた。15は丸底を呈し、内外面に刷毛目を有する。

16は複合口縁でやや内湾して広がり、頸部以下もつよく内湾している。口縁部に3本の平行沈線文を有し、胴部に刷毛目がみられる。17は口縁端部がやや肥厚し外反して広がり、頸部から「く」の字形に屈曲している。内面はヘラ削りで、口縁部内面と胴部外面に刷毛目がみられ、後に頸部外面にヨコナデを施す。

18は櫛状工具による刺突文を施している。

19～21は高杯である。19は杯部の口縁部と思われる。端部が肥厚し、口縁端部に2条の沈線を施す。20は口縁が外反して広がり、杯底部がやや屈曲している。杯部の内外面とも脚部はタテ方向の

ヘラミガキで、口縁部、杯底部にヨコナデがみられ、脚部内面にはナデが施されている。21は脚部で環部に接合したものである。外面に縦方向のヘラミガキを施す。

22はやや内湾して広がる口縁、内面ヘラ削り、外面に刷毛目がみられ、口縁部はヨコナデを施す。

23, 24は坏である。平底で体部が外傾して開くものである。23は内面をヘラミガキ、口縁部にはヨコナデを施す。外面、底面に不定方向の刷毛目を有する。24は外面に刷毛目が施されている。

当地点出土の弥生土器は後期のもので、土器器は、古墳時代前期に属すると考えられる。

(松尾晴司)

第2表 波子遺跡出土弥生土器・土器器観察表

番号	出土地点	器形	口(底)径(cm)	形態・調整・文様	H付	胎土	色調	焼成
A地点 1	A-Ⅱ		7.0	底部、平式 無軸、回転ナデ		密	淡赤褐色	良好
B地点 1	B-N 3層	甕	18.4	複合口縁、口縁部は外反し、横方向の平行沈線文内外面ヨコナデ	87. 4.27	〃	黄白褐色	〃
2	B-N 9層	〃		複合口縁、口縁部は外傾、内面ヘラ削り、外面ヨコナデ	87. 4.29	〃	灰褐色	〃
3	B-Ⅱ 3層	〃	23.4	複合口縁、口縁部は外傾、内面ヘラ削り、外面ヨコナデ	87. 4.25	〃	淡黄褐色	普通
4	B-Ⅱ 3層	〃	20.8	複合口縁、口縁部は強く外反し、下部はやや内湾、口縁下部に斜方向に刷毛状工具による文様	87. 5. 7	〃	明黄褐色	良好
5	B-N	〃	18.4	複合口縁、口縁部は外反し、下部が外方に突出する。内外面ヨコナデ、端部に貝殻による横方向沈線文	87. 4.29	〃	暗茶褐色	〃
6	B-N	〃	15.8	複合口縁、口縁部はやや外反し、上部に平出面、下部が下方に突出、内外面ヨコナデ	87. 4.29	〃	黄白褐色	〃
7	B-Ⅱ 3層	〃	29.2	複合口縁、口縁部は外傾し、端部深くぼみ、下部は下方に突出、内外面ともヨコナデ	87. 4.25	〃	暗茶褐色	〃
8	B-Ⅱ 3層	〃	17.6	単純口縁、口縁部は外反、内外面ともヘラ削り、刷毛目	87. 4.24	〃	黄褐色	〃
9	B-Ⅱ 3層	〃	13.2	単純口縁、口縁部は外反、口縁部ははやや内湾、内面削り、外面刷毛目、口縁部内外面ヨコナデ	87. 5. 7	〃	明橙褐色	〃
10	B-Ⅱ	〃	15.5	単純口縁、口縁部は外反、口縁部内面にヘラミガキ、他はヨコナデ	87. 5. 4	〃	淡黄褐色	〃
11	B-I	〃	14.7	単純口縁、口縁部は外反、外面へらミガキ、内面環部削り、口縁部ヨコナデ	87. 4.23	〃	明赤褐色	〃
12	B-Ⅱ	〃	20.8	単純口縁、口縁部は外反、内外面ヨコナデ	87. 5. 7	粗	暗茶褐色	〃
13	B-N 3層	〃	9.9	単純口縁、口縁部は外反、頭部以下内外面に刷毛目、口縁部内外面ヨコナデ	87. 4.29	密	赤褐色	〃

番号	出土地点	器形	口(底)径(cm)	形態・調整・文様	H付	胎土	色調	焼成
14	B-Ⅲ	不明	5.1	平底の底部、粘土態を貼り付ける。内外面の一部に刷毛目	87. 4.27	密	暗褐色	良好
15	B-Ⅳ	〃		丸底の底部、内外面の一部に刷毛目	87. 4.27	〃	淡黒褐色	普通
16	B-Ⅳ	不明	14.7	複合口縁で全体に内湾する。刷部に刷毛目、口縁部に平行沈線文(3条)	87. 4.27	〃	明茶褐色	〃
17	B-Ⅳ 9層	〃	32.0	口縁部は外反して広がる。内面倒り、外面ヨコナデ。口縁内面と外面頸部以下に刷毛目	87. 4.27	〃	明赤褐色	〃
18	B-Ⅲ 4層	〃	不明	櫛状工具による斜めの刺突文	87. 5.6	〃	淡黄褐色	普通
19	B-Ⅲ 3層	高坏	不明	杯部の口縁部、端部は肥厚し、2条の沈線を施す。	87. 5.7	〃	〃	良好
20	B-Ⅳ	〃	20.8	口縁部は外反して広がる。内外面ともタテ方向のヘラミガキ。口縁部・杯底部にヨコナデ、脚部内面にナデ	87. 4.29	〃	赤褐色	〃
21	B-Ⅳ	〃	15.2	つよく湾曲して、立ち上がる脚部。先ず杯部をつくり接合したもの。外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はヘラ削り	〃	〃	黄茶褐色	〃
22		不明	25.6	口縁部はやや内湾。内面ヘラ削り、外面刷毛目。口縁部は内外出ヨコナデ	〃	〃	明赤褐色	〃
23	B-Ⅳ	杯	口径 11.3 底径 5.5	平底で外傾してひろく。内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、外面・底面の一部に刷毛目	〃	〃	淡茶灰色	〃
24	B-Ⅳ	〃	16.0	平底で外傾してひろく。底部のみ。外面に刷毛目	〃	〃	淡黄褐色	〃
大平浜 1	Ⅳ	蓋 坏身	約14.0	受け部が短く浅い器形。立ちあがると受け部の境に沈線状のくぼみ外面にカキ目	87. 5.8	〃	灰褐色	〃
2		〃	15.8	受け部が短く浅い器形。底部に回転ヘラ削り施す。		〃	黄灰白色	〃

c. 石器

B地点では総計250点の石器等が出土した。中には石器とは断定し難いものも多かったが、若干使用痕が認められることや、立地が砂丘上で自然石の混入がみられないことなどから、これらは人為的に運ばれ、使用されたものと思われるので一応石器として扱った。なお表採も含めており、欠損品も1点として計算した。種類としては石錘、磨石、石皿、石斧、砥石、石鏝、刮片がある。地区別にみると、B-Ⅳ区から多くの石器が検出されている。

今回の調査において石器等が検出された地層はいずれも縄文～近世までの遺物が混在しているため、これらの所属時期を決定することは困難である。

石錘(第16図 1~5) 石錘は表採も含め7点出土した。そのうち4点がB-V区から出土している。ここでは7点中5点を資料として図示する。1~3は河原石の両端を長軸方向に打ち欠いたもので、両端とも両面から加工している。4も河原石の両端を打ち欠いており、両端とも両面から打撃を加えている。これは10cmを超える大型のもので、片面が平坦で、磨痕らしいものが認められる。そのため磨石を転用した可能性も考えられる。5は河原石ではなく、ひじょうに扁平な石を長軸方向に両端を打ち欠いたものである。1と3は酸性火山礫凝灰岩製、2は安山岩製、4は石英閃緑岩製、5は千枚岩製である。

磨石(第16図 6・7、第17図 8~16、第18図 17~19) ここでは敲石にも磨痕がみられるものが多く、一括して磨石として扱った。総計25点出土しており、資料として図示した14点のうち9点がB-V区から検出されている。その殆どが河原石を使用しており、7~8cmのものが最も多い。また17cmを超える大型のものもあるが、すべて片手で扱える大きさのものばかりである。風化しているものも多く、磨痕が人為的なものか断定し難いものもある。

6~11は片面もしくは両面に磨痕のみられるもので、このうち6~9は片面のみ磨いている。10は全体的に光沢があり、片面がほぼ平坦であるが、たんなる自然石の可能性も考えられる。11は表面に磨痕らしいものが認められ、磨石、あるいは石皿の一部と思われる。

12・13は敲打痕のみみられ、磨痕は認められない。12は長軸方向の一端部に敲打痕が認められる。13は側面に細かい敲打痕がみられる。周縁には敲打によって生じた大きな剝離がみられる。

14~19は敲打痕と磨痕両方みられるもので、敲打痕には表面中央が凹んだものと、側面を敲いた両方がある。このうち14は片面のみ磨っており、同じ面に敲打痕らしいものがみられるが、人為的なものは断定し難い。15は片面中央に凹みを持ち、全面磨っているようである。16は片面に磨痕がみられる。長軸方向の両側面に敲打痕らしいものがあるが、風化のため確定は出来ない。17は片面のみ磨っており、敲打痕は両面と側面にみられる。18は両面磨っており、また自然面と使用面との境がはっきりしないことから、全面を磨った可能性もある。全側面には敲打痕がみられる。19は片面が平坦で磨っていると思われ、一端には敲いた痕がみられる。7は玄武岩製で、8~10、14、17~19は石英閃緑岩製、11はドレライト製、12と16はディサイト製、13と15は酸性火山礫凝灰岩製である。6の石材は不明である。

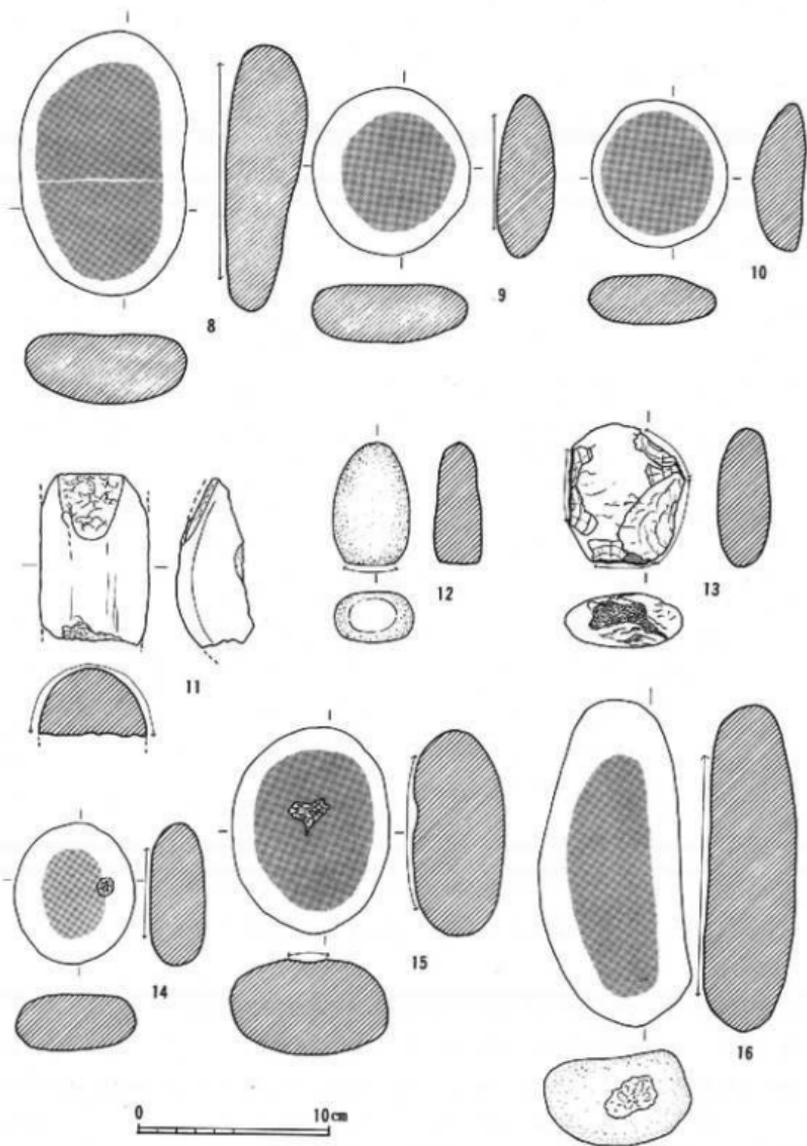
石皿(第18図 20・21) 全部で4点確認されたが、その内の特徴的な2点を実測した。

20は大部分が破損しており、原形は推定し難い。縁部に自然面が残っており、磨面は一面のみである。磨きの方向は不明である。21は砂岩質の硬い石で、明灰白色をなす。磨面はかなり風化しており、側面には自然面が残るが、他は欠損している。20は石英閃緑岩製、21は砂岩製である。

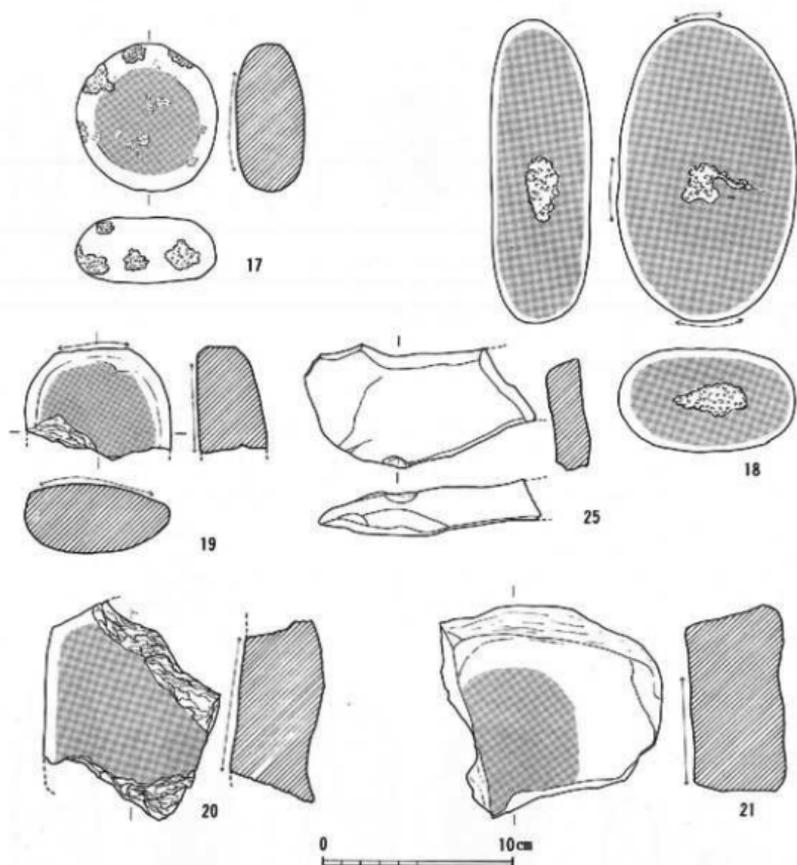
石斧(第16図 22~24) 石斧は全部で3点確認された。いずれも欠損のみられる磨製石斧で、打



第16图 波子遺跡B地点出土石器実測図(1)

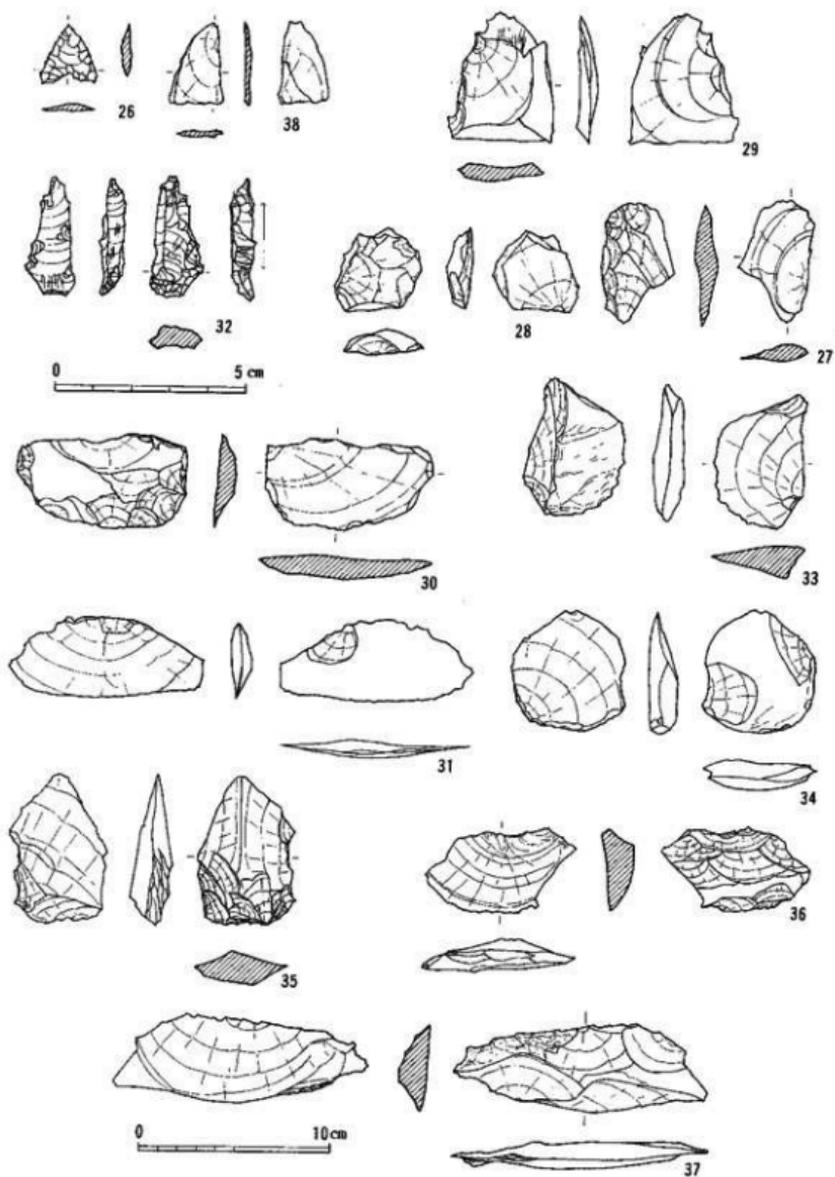


第17图 波子遺跡B地点出土石器実測図(2)



第18図 波子遺跡B地点出土石器実測図(3)

製石斧は出土していない。22は現存長10.5cmの磨製石斧である。刃部先端は欠損している。全体的に風化が著しく、研磨痕は観察できないが、基部に打撃による整形痕がみられる。23は刃部が数mm欠損した磨製石斧である。両側縁に剝離がみられ、一側縁は両面から加工、一側縁は片面から加工している。24は1/3~1/2が欠損する短冊形をなす。全体的に風化し、特に片面にはかなりの風化がみられるため、使用痕は観察できない。22は斑瀾岩製、23は安山岩製、24は珪長質凝灰岩製である。



第19图 波子遗址B地点出土石器实测图(4)

砥石(第18図 25) 砥石はただ1点のみえられている。図示したものは最大長12.3cm、最大幅6.5cm、最大厚1.8cmで、B—Ⅳ区で出土した。自然石の平坦面を研ぎ面としたもので、一面のみを研ぎ面とする。1/2残存し、一縁辺部に少量の鉄分の附着がみられる。一面はかなり使い込まれ、研ぎ面には擦痕が明瞭に観察できる。鉄器用の砥石の可能性もある。石材は安山岩である。

石鏃(第19図 26) 明確な石鏃は1点のみである。最大長1.5cm、最大幅1.1cm、最大厚0.3cmの完形品である。

二等辺三角形を呈し、凹基式である。側縁には細かい剝離調整がみられるが、中央には大きな剝離面が残る。石材は頁岩である。

剝片(第19図 27—38) 全部で16点確認された。実測したものはB—Ⅰ区とB—Ⅳ区の出土遺物である。

27の主要剝離面には、二次加工はみられない。背面には一側縁に二次加工が施されている。28は平面形は五角形を呈し、周縁には二次加工がみられるが、一面にはみられない。風化のため全体的に白っぽくなっている。29は両面とも一方向からの打撃による大きな剝離がみられるが、一面には一部自然面が残っている。一面の一縁辺部に数ヶ所二次加工が認められる。30は背面に一部自然面を残し、縁辺は打ち欠いた粗い剝離痕がめぐる。主要剝離面には、縁部にわずかに細かな剝離がみられる。31は二次加工のない剝片である。背面は自然面であり、1ヶ所だけ剝離痕が認められる。32は黒曜石製の3cm程の縦長剝片であり、側縁下部に小さな剝離がみられる。一側面に比較的大きな不純物があり、この面は1回の打撃で生じた階段状剝離がみられる。この剝片は上下2方向からの打撃が加えられている。33は二次加工のみられない剝片である。背面には自然面が残る。34は背面に2ヶ所の剝離がみられるが、大部分は自然面である。主要剝離面は縁辺の一部に二次加工がみられる。35は背面の下端には二次加工が施されている。36の背面は一部自然面が残り、2方向からの打撃がみられる。37の背面に2ヶ所自然面が残る。主要剝離面には一部二次加工がみられる。38は一方向からの打撃による剝片と思われる。石材は、28が角閃石ゲイサイト、32が黒曜石、33と35が流紋岩で、27—31、34、36—38は頁岩である。

その他(第16図 39) この石器の性格は正確には把握し難いが、長軸方向一端部に敲打痕が認められる。長さ8cm、幅2.5cm、厚さ1.1cmを測る短冊形の石器で用途は不明である。両面には大きな剝離痕が残り、上端には細かい打痕がみられる。側縁は自然面のままである。

(大西貴子・柴尾由美)

註(1) 山本 清「西山陰の縄文文化——土器を中心として——」『山陰文化研究紀要』第1号 1961年

第3表 波子遺跡B地点出土石器一覧表

(石 錘)

挿 査 図 号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	遺存状態	出土地点	材 質
14-1	7.0	4.75	1.9	100	1部欠	B-I 表採	酸性火山礫凝灰岩
14-2	6.2	5.35	1.9	85	完形	B-VI	安山岩
14-3	8.2	7.4	2.3	210	〃	B-VI 9層	酸性火山礫凝灰岩(弱粘性)
14-4	11.2	10.8	3.3	745	〃	B-VI 9層	石英閃緑岩
14-5	7.6	6.0	1.3	80	〃	B-VI	千枚岩

(磨 石)

挿 査 図 号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	遺存状態	出土地点	材 質
14-6	8.2	7.4	3.2	290	完形	B-VI 3層	不明
14-7	10.0	9.8	5.3	882	〃	B-IとB-IIIの間	玄武岩
15-8	14.0	8.5	4.0	841	〃	B-VI 3層	石英閃緑岩
15-9	8.7	8.2	3.0	418	〃	B-VI	石英閃緑岩
15-10	7.7	7.1	2.6	248	〃	B-VI	石英閃緑岩
15-11	8.8	5.7	3.4	245	1部残存	B-VI	ドレライト
15-12	6.5	4.0	2.6	112	完形	B-VI	デイサイト
15-13	7.4	6.1	2.9	175	〃	B-I	酸性火山礫凝灰岩
15-14	7.5	6.4	3.0	226	〃	B-VI	石英閃緑岩
15-15	10.9	8.2	4.8	705	〃	B-IとB-IIIの間	酸性火山礫凝灰岩
15-16	17.2	7.4	4.7	711	〃	B-I	デイサイト
16-17	7.8	7.3	3.4	302	〃	B-VI	石英閃緑岩
16-18	15.9	9.3	5.2	1330	〃	B-VI	石英閃緑岩
16-19	7.5	5.9	3.5	226	1/3~1/2欠	B-VI 9層	石英閃緑岩

(石 皿)

挿 査 図 号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	遺存状態	出土地点	材 質
16-20	10.0	8.7	4.4	585	1部残存	B-VI 9層	石英閃緑岩
16-21	11.7	11.3	5.5	910	1部残存	B-VI 3層	砂岩

(石 弁)

挿 査 図 号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	遺存状態	出土地点	材 質
14-22	10.5	5.2	2.9	215	1/4欠	B-VI	はんれい岩
14-23	8.5	5.3	2.0	100	〃	B-VI	安山岩
14-24	5.8	5.7	2.1	120	1/3~1/2欠	B-VI 流砂層	石英閃緑岩

(制 片)

挿 査 図 号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	遺存状態	出土地点	材 質
17-27	6.3	3.8	1.0	18	〃	B-I	頁岩
17-28	4.1	4.3	1.3	25	〃	B-VI	角閃石デイサイト
17-29	6.6	5.2	0.8	35	〃	B-VI	頁岩
17-30	4.9	8.9	1.0	48	〃	B-VI 9層	頁岩
17-31	4.1	10.2	1.0	42	〃	B-VI 9層	頁岩
17-32	3.2	1.3	0.6	1.71	〃	B-I 9層	黒曜石
17-33	7.1	5.0	1.6	42	〃	B-VI	流紋岩
17-34	6.4	5.7	1.6	55	〃	B-VI	頁岩
17-35	7.7	4.8	2.0	55	〃	B-VI	流紋岩
17-36	4.2	7.8	1.6	40	〃	B-VI	頁岩
17-37	4.4	12.5	1.4	65	〃	B-I	頁岩
17-38	2.2	1.1	0.2	0.5	〃	B-VI	頁岩

第2節 大平浜遺跡の調査

1. 調査区の概要

浜田市久代町に属する本遺跡は、大平山北麓の国道9号線南沿いにある採砂跡地に位置する。砂丘が削り取られてコの字状になった崖面の西から順にⅠ～Ⅷトレンチを設け、Ⅳトレンチの西側に張り出した土手にⅥトレンチ、Ⅱ・Ⅲトレンチ間の上の丘陵斜面にⅤトレンチを設定した。

Ⅰトレンチ 幅約3m、長さ約30mのトレンチを崖面に入れたが、黒色砂層、遺物とも検出されなかった。

Ⅱトレンチ 幅約3m、長さ約50mのトレンチを丘陵斜面に入れたが、黒色砂層、遺物とも検出されなかった。

Ⅲトレンチ 幅約3m、長さ約50mのトレンチを丘陵斜面に入れた。東壁セクションに見られる基本的な層序は、上から表砂層-黒色砂層-黄褐色砂層で、黒色砂層は何等かの削平を受けて途中が分断されているが、標高22m~17mあたりでは急な斜面となっている。遺物は認められなかった。

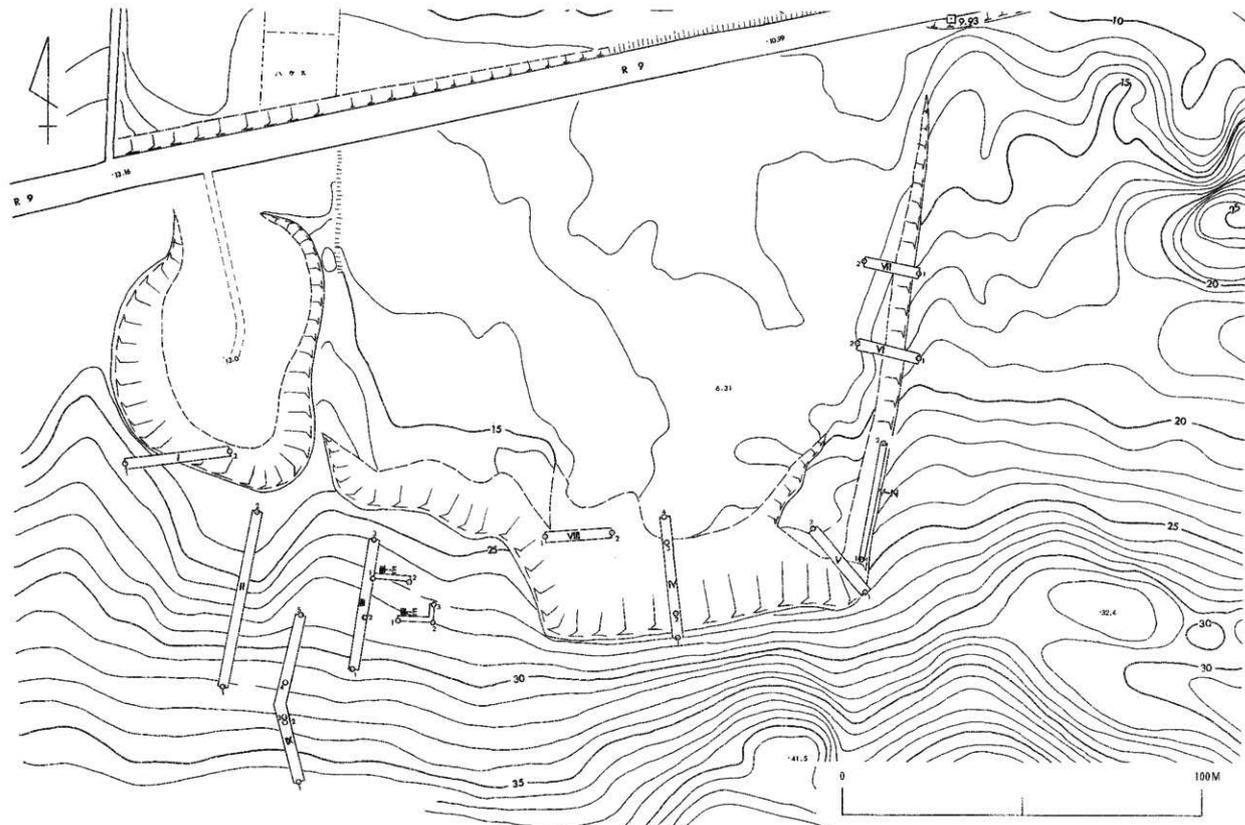
Ⅳ-東トレンチ Ⅲトレンチの東側に隣接して上段、下段の2本のトレンチを入れた。上段トレンチは東西約10m、東端から北へ約5mの鍵形をなし、下段トレンチは東西10mで設定した。上段、下段の東西セクションは、表砂層-黒色砂層-黄褐色砂層となっている。上段の黒色砂層は厚さ30cm前後、東西セクションを見ると標高21.6mではほぼ水平に堆積している。トレンチ東壁の南北セクションでは厚さ40~50cmで北へ傾斜し、南端より2m北で地表に出て消える。下段の黒色砂層は厚さ20cm程度、標高18.5mである。遺物としては土師器片が数点出土した。

Ⅳトレンチ 幅約3m、長さ約35mのトレンチを崖面に入れた。標高21m~14mにかけて南側の崖面下へ急傾斜する黒色砂層面を検出した。遺物は、黒色砂層上面に土師器片及び須恵器片が数点出土した。

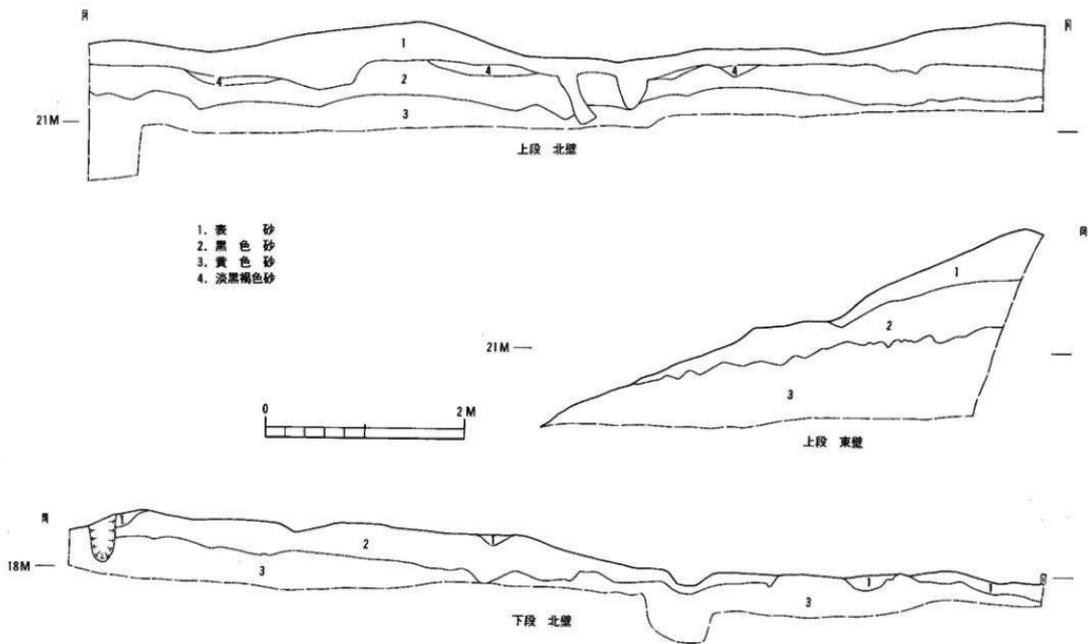
Ⅴトレンチ 幅約3m、長さ約16mのトレンチを崖面に入れたが黒色砂層、遺物とも検出されなかった。

Ⅴ-北トレンチ Ⅴトレンチの北側崖面に南北に約34mにわたり厚さ3~10cmの黒色砂層の存在が確認された。標高は南端21m、北端18.4mで緩やかに北へ向かって傾斜している。遺物は出土しなかった。

Ⅷトレンチ 幅約3m、長さ約18mのトレンチを崖面に入れたが黒色砂層、遺物とも検出されなかった。



第20図 大平流連跡周辺地形図・トレンチ配置図

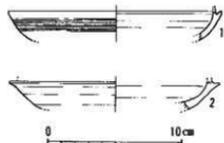


第21図 大平浜遺跡Ⅱ-東トレンチ土層断面図

Ⅳトレンチ 幅約3m、長さ約16mのトレンチを
崖面に入れたが黒色砂層、遺物とも検出されなかつた。

Ⅴトレンチ 幅約3m、長さ約16mのトレンチを
崖面に入れたが黒色砂層、遺物とも検出されなかつた。

Ⅵトレンチ 幅約3m、長さ約50mのトレンチを
丘陵斜面に入れたところ、Ⅵ-2トレンチとⅥ-3
トレンチとの間で南に傾斜する黒色砂層面（標高32m～31m）を検出した。遺物は出土しなかった。



第22図 大平浜遺跡出土須恵器実測図

(吾郷和宏)

2. 出土遺物 (第22図)

大平浜遺跡では、少数ではあるが、風化の著しい土師器小片と須恵器片が出土した。このうち器形がわかるものは須恵器片である。1・2とも、蓋杯の身である。いずれも小片のため、全体をうかがうことはできないが、比較的浅い器形であろう。ともに受け部が短かく、1は立ち上がりと受部の境は沈線状の鋭いくぼみが見られる。調整は、1の外面にはカキ目を施し、また2の底部には回転ヘラ削りが施されている。いずれも時期は山本編年Ⅲ期に属すると考えられる。(松尾晴可)

註1) 山本 清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』1960年

第4章 分布調査

発掘調査の最終日の5月9日、以前に相当量の土師器、須恵器片が表採されたという大平山の西方にあるぶどう畑一帯の分布調査を行った。ここは、大平山の頂上から西方に延びる丘陵上を造成してぶどう畑にしたところで、標高は約35m～40mである。分布調査は、このぶどう畑の東側にある2ヶ所の採砂跡地を中心に行われた。以前は北側の採砂跡地で土器が多数採集されたというが、今回は1時間の踏査であったが、南側の採砂跡地の東側の岸斜面で、口縁部から胴部にかけての土師器壺片を表採したのをはじめとしてビニール袋1袋分の土師器・須恵器が表採された。

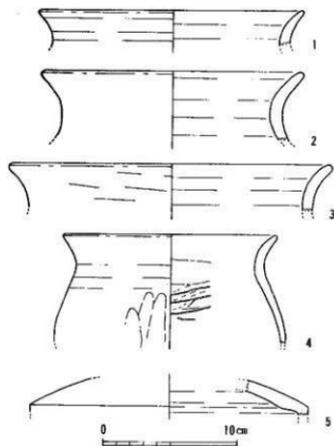
この地域の地名から、遺物が採集された地点を越峠遺跡と称することにした。

採集された遺物の記載は以下の通りである。

表採遺物の種類は土師器・須恵器片である(第23図)。1～4は土師器の壺である。口縁部が矩かく外反するもので、いずれも口縁にヨコナデを施し、4は頸部以下内面をへら削り、外面にもタテ方向のへら削りが施される。

5は須恵器で、長頸壺の肩部かと思われる。胎土には1～2mmの砂粒を含み、表面に緑灰色の自然釉の付着が斑状にみられる。時期は奈良時代以降と考えられる。

1～4の土師器もその所属時期は5の須恵器と相前後するものであろう。(吾郷和宏・松尾晴司)



第23図 越峠遺跡出土土師器・須恵器実測図

第4表 越前道跡採集土器観察表

番号	出土地点	器形	口(底)径(cm)	形態・調整・文様	H付	胎土	色調	状況
1	表採	甕	19.6	口縁部が細かく外反、内外面ヨコナテ	87.5.9	密	橙白褐色	普通
2	〃	〃	19.0	口縁部が細かく外反、風化激しい	〃	〃	〃	〃
3	〃	〃	24.0	口縁部が細かく外反、内外面ヨコナテ	〃	粗	黄白褐色	〃
4	〃	〃		口縁部が細かく外反、頸部以下内面はヨコ方向のへら削り、外面はタテ方向のへら削り、口縁部は内外面ヨコナテ	〃	密	〃	良好
5	〃	不明	30.6 残存部の径	常規の肩部分、内面は回転へら削り、外面は緑灰色の自然釉が付着。	〃	〃	黄灰白色	〃

第5章 総 括

「波子遺跡は残っていた」われわれが1987年に実施した大平山遺跡群の調査は、このことが出発点であり、結論となった。そして今は「どのように残すのか」、「残してどう活かすのか」が正面から問われることともなってきた。そのように問われるのは、ひとつには1949年の遺跡の発見から今日に至るまでに蓄積されてきた波子遺跡の研究成果によって、本遺跡が山陰地方における縄文中・後期の代表的な遺跡であり、砂丘地帯に営まれた学術上きわめて貴重な原始時代の集落跡ということが明らかにされたことである。また石見海浜公園の建設という現時点の問題との関わりにおいて、大平山一帯に埋もれる原始・古代の遺跡、あるいは中・近世から近・現代にわたってこの砂丘に印された人の営みの跡を地域の歴史の歩みとして保存し、正しく継承していくことがこれまでになく強く求められてきたという事情もある。われわれは大平山遺跡群が置かれているそうした状況を背景として今回の遺跡調査と遺物の整理にあたってきた。得られた成果を以下に列記しよう。

1) 縄文時代の著名な遺跡であり、原始・古代遺跡の発見例が比較的に少ない石見地方にとっては地域を代表する遺跡でもあった波子遺跡は、1974年頃の大がかりな採砂事業によって「消滅した」とされてきた。しかし今回の調査の結果、従来波子遺跡のA地点とされた個所は予想通り存在しなかったが、B地点とされた個所はかなりの部分が残存していることを確認することができた。「波子遺跡は残っていた」とする中身の最大の部分である。

同時に波子遺跡の西方に大平浜遺跡を検出し、南西方向に越峠遺跡の存在を確かめることができた。これらの検出・確認作業を通じて大平山の周辺にはなお未発見の遺跡が存在すると予測されることから波子遺跡をはじめとする大平山一帯の諸遺跡を一括して大平山遺跡群として捉え、意義付けていくことを提唱しようと思う。

2) 波子遺跡のB地点に関する知見は次ぎのような諸点である。

(i) B地点の採砂による破壊がどの程度であったかは現状で確かめる術はない。ただ、現存する採砂場の西側崖面に設定したB-1～B-4の各トレンチにおいて黒色ないし黒褐色砂層・「クロスナ層」の存在を確認することができた。各々のトレンチにおける「クロスナ層」の在り方はそれぞれに異なっており、トレンチ相互間の関連性についても必ずしも明瞭ではない。B-1では上、下2層の「クロスナ層」が褐色ないし黄褐色砂層を間に挟んで存在していた。B-2では1層のみが検出されているが、この「クロスナ層」は位置関係からみてB-1上位の「クロスナ層」に連続するものであることは確実である。B-3発見の「クロスナ層」はやはり上、下に2層あり、上方

の層は水平に薄く堆積している。標高は約17mと測定された。下方の層は上面の標高約10m、厚く堆積し、南に向かって傾斜している。この下方「クロスナ層」自体には、濃黄色砂層をサンドイッチ状に挟んで上下に黒色砂層が横たわり、層全体が堅く締まって不透水層となっている。B-Ⅳトレンチとその拡張区からは南に緩く傾斜する黒色砂層の上面が広く検出された。この面は標高が8.7~6.9mで、位置関係からみてもB-Ⅲの下方「クロスナ層」と一続きのものであることは間違いない。問題はB-Ⅰの上、下2層の「クロスナ層」とB-Ⅲの上方と下方の2層の「クロスナ層」がどのような関係にあるかということだが、結論的にいえば今次の調査でこの点は掘み切れていない。したがって不明とせざるをえないのであるが、多少推論的にいえば、3層以上の「クロスナ層」の存在が想定されるのである。

(ii) 角田氏は「上位クロスナ層」、「下位クロスナ層」の2層の存在を指摘されたのであるが、それはおそらくB-Ⅲ付近に露出していた砂丘断面の観察から導かれたことであろう。とするのは、角田氏が「下位クロスナ層」の形成期の考察に当たって山崎氏らの見解を引き、この層からは縄文時代の後期から古墳時代の中期頃までの土器が出土したということを抱所としているからである。

今回の調査においては、山崎氏等の「堀之内式云々」はとにかくとしても、B-Ⅲトレンチの下方「クロスナ層」からは多量の縄文後期の土器や古式土器が出土することを確認している⁽¹⁾。角田氏のいう「下位クロスナ層」はわれわれが認めた下方「クロスナ層」のこととして差し支えない。とここでこの下方「クロスナ層」はまた上下2層の黒色砂層からなるという事実がある。しかも上部の層には古式土器が検出され、その上面はB-Ⅳで知られたように枕列穴等が残り、何等かの生活面的な様相がうかがわれた。下部の層からは縄文後期の土器が集中的に出土している。つまりB地点では縄文後期の土器と古式土器が混在するのではなくて、上、下の層に分かれた整然とした層序関係を保って存在していることが知られるのである。

次ぎに角田氏のいう「上位クロスナ層」がB-Ⅲの上方「クロスナ層」にあたることは上記の事由から首肯できる。これとB-Ⅰ、B-Ⅱの「クロスナ層」がどう対応するのかが問題である。事実としては先述のように確認できないが、推論の手掛かりとしてB-Ⅰの上部「クロスナ層」とこれにつながるB-Ⅱの「クロスナ層」は標高では約15~14mを示して南方向に緩かに傾斜し、層からは古式土器が出土している。これらの事実から推せばこの「クロスナ層」は、あるいはB-Ⅲの下方「クロスナ層」の上部黒色砂層に続くかとも考えられよう。検討課題である。しかしB-Ⅰの「クロスナ層」がB-Ⅲの上方「クロスナ層」に連続する可能性は、以上の状況からみてもほとんどないといってよいであろう。角田氏の年代比定にしたがえば、平安時代中頃に形成された最上部の「クロスナ層」ということになる⁽¹⁾。

残された問題はB-Ⅰの下部に存在する「クロスナ層」の扱いである。検出位置はB地点のほぼ

最上部に相当し、縄文中期の「波子式」土器片等がこの層の上面で見出されているが、層の広がり方については詳らかにできない。B-Wでこの層の上面を一部検出したが、崖状の砂に覆われていたため層としての安定性には問題が残る。いずれにしても最下位の「クロスナ層」であることには間違いないが、それ以上のことは不明とする他はない。ただB地点の最高部からも「波子式」土器が出土したことは、これまでのA、B地点の性格に関する見解に訂正を迫るものである。

3) 波子遺跡A地点については、しばしば触れたように、すでに「ない」。今回は新たに曲川沿いの残骸砂丘をもってA地点とした。設定されたトレンチ中A-Ⅱ、A-Ⅲからは緩やかに曲川の方に傾斜する黒色砂層が検出されている。層の上面は堅く、弥生土器、土師器、陶器の破片が少量出土しているが、上部の砂層から相当な攪乱が及んでおり、正確な観察は困難であった。しかし層の高位の標高が約5mを測ることからあるいはB地点の下方「クロスナ層」とつながる可能性もなくはない。

4) 今回の調査ではB地点からかなりの量の遺物の出土があった。内容的には従来B地点の遺物に関していわれてきたことと根本的に相違するものはないが、いくつかの点で新たに判明したことがある。各遺物についてのまとめを以下列記する。

(i) 縄文土器について

今回の調査において出土した縄文土器で型式・所属・時期を明らかにしようと考えられるものは、A類-a、C類-a、D類である。A-aは先述のように波子式の特徴をもつもので、中期に属するものと考えられる。底部の中にも波子式と認めうるものがあるが、断定はできない。その他A類の中には縄文中期の所産とみなしうるものが散見されるが、なお全体的には時期を明確に捉え難い。

D類は磨消縄文を主体とするもので、これらは縄文後期の所産と考えてよい。型式別に見ると、後期初頭の中津式と考えられるものに46・71・72がある。59・61は型式的には「狭い磨消縄文帯を有すること、口縁部が緩く内湾したり、肥厚すること、さらに、その端部にも磨消縄文帯を施すことなどから、中津式から福田KⅡ式へ移行する段階の時期³⁸⁾」を考えたい。福田KⅡ式と理解しうるものは、55・56・58・60・62・63・114である。福田KⅡ式から彦崎KⅡ式の間を埋めるものとして島KⅡ群に似たモチーフをもつC類-aの30・31がある⁴⁰⁾。これらは鎌ヶ崎系にあたる土器であろう。その他に57・68・67がこの時期のものとして考えられ、彦崎KⅡ式に併行するものとして37・38・39・45・103、彦崎KⅡ式に相当するものに65・66がある。また出土した土器の中には28のように当地では見られないものがあり、他地域からの搬入土器と考えられる。

従来、「縄文土器にはA・B両地点で、その形式が全く相違している。(中略)B地点では、後期・晩期土器及び弥生末ないし古代土師器を包含している³⁹⁾」といわれているが、今回の調査ではB地点からも縄文中期の土器が出土したことにより、A・B両地点の時期については再検討を要するだ

らう。

A地点にも少し触れておくと、今回はA地点から縄文土器の出土は見られなかった。このことから、かつてのA地点は採砂によって壊滅的な打撃を受けていると思われる。

(ii) 弥生土器・土師器については、B地点のB-Ⅲの下方「クロスナ層」とB-Ⅰ、B-Ⅱの上部「クロスナ層」出土の土器を中心に解説した。これらの土器中、口縁部に二枚貝の貝縁と思われる施文具で多条の平行沈線をした壺・甕形土器は弥生後期後半に位置すると考えられるが、量的には少ない。大半のものは須恵器を伴出しないう古式の土師器である。したがってこれらの土器を含有する「クロスナ層」は弥生時代の終末期から古墳時代の前半期にかけて形成されたとするのが正確な年代判定である。

波子遺跡ではこれまでも大量の土器が採集されてきている。それらは波子公民館、島根大学に保管されているもの他個人の収集になるものも相当あり、いくつかについては実見しえた。多くの土器は縄文時代に属するが、弥生土器もかなり見受けられる。主として弥生後期後半のものであるが、中には前期、中期の土器も散見されて注意を惹いた。

(iii) 石器については特筆すべきことがある。それは波子遺跡にも黒曜石が存在するという点だ。量的には必ずしも多いとはいえないであろうが、確実に「ある」。今回の調査で検出された黒曜石片の他に個人の収集品にも含まれている。肉眼的な観察では隠岐産のように思われるが、物性分析による鑑定が必要であろう。黒曜石の存在が確かなこととなれば、門脇氏が構想されたような縄文時代の後半期における石束・石尖の独自の経済圏の想定は主張の根拠を失ったことになろう⁴⁰。

その他の石器については、前項の記載の通りで、所属年代が確定できないという弱点が存在する。多くの石器は縄文時代の所産とも見做しうが、さらに詳細な時期比定は現状では不可能といってよい。若干注意される点は、石斧・石鎌の量が比較的小さいように見受けられることである。今後石鏃、石皿・磨石のセット等の出土量とも合わせて波子遺跡における狩猟・漁撈・植物採集の複合的な生産活動を復元的に考察しなければならぬであろう。なお波子公民館の保管遺物や個人の収集品中には緑色凝灰岩片や鉄滓が含まれていることを付記しておく。

波子遺跡に関する新たな知見は、以上のことに尽きるものではないが、まずは特徴的な事実と多少の評価を示した。結びとして波子遺跡の原始・古代集落としての様相について若干付言しておく。波子のこの地に集落の形成が開始されたのは、しばしば説く縄文中期のことであった。集落が営まれたのは西または北西から東または東南方向、つまり曲川に向かって緩く傾斜する砂丘の斜面であって、角田氏がいうように、おそらくこの頃から砂丘の固定期に入り、ここに草木が生えて居住適地が出現したのであろう⁴¹。北西風の影響が少なく、日当たりにも恵まれていることも居住条件に加えられたものと想像される。それと同時に生産活動上の選地条件が当然問題になってくる。考え

られることは曲川河口の湖・沼沢化ということで、現在遺跡の北東側に大きくラップ状に開く低地が生業の場となった可能性がある。このことは縄文海進とのかかわりにおいて考察する必要があるだろう。

山陰地方では縄文中期頃は海進が頂点に達し、後期には海退に転じたとされている⁴⁰。角田氏等も江津砂丘地帯に海進の痕跡が認められるとしている⁴⁰。

海水準の変化と集落遺跡の動態との対応関係についての研究は、あまり進んでいるとはいえない。しかし、例えば出雲平野には縄文後期後半頃から大社町原山遺跡、出雲市矢野遺跡等が出現するが、そうした平野の中に成立する縄文遺跡の立地条件として海退と斐伊川・神門川の堆積作用で、遺跡の近辺に広い沼沢地が形成され、そこでの漁撈と採採活動が可能になったことがあげられている⁴⁰。市原寿文等の研究によれば、縄文遺跡の成立と存続にとって近接地に沼沢地の存在することが一つの重要なファクターをなしているようであるから、それ程大規模ではないにせよ曲川河口に形成されたと推定される湖・沼沢地の消長が、波子遺跡存立の基礎的な条件をなしたということはじゅうぶん考えられよう。その意味でもこの遺跡における縄文後期後葉から晩期にかけての動向が目まぐるしく、弥生前期の段階での水稲栽培が海退によって生じた湿地を水田化して行われたことは想像に難くないのである。以後弥生中・後期から古墳時代にかけての農業生産も主として曲川河口に耕地を開き、拡大しつつ継続されたことと思われる。

波子遺跡存立のいま一つの条件として、砂丘の固定ないしは相対的な安定ということがあげられる。この点はすでに指摘してきたことであるが、少なくともB-下方「クロスナ層」の事実による限りでは、縄文時代の後期から古墳時代の前半期にかけては大規模な砂の堆積または移動はなかったと考えられ、角田氏の見解の妥当性が改めて想起されよう。今後砂丘の生成史のより詳細な検討によって集落の変遷過程との相関関係が解明されることを期待したい。

大平浜遺跡の確認は、大平山の一帯に複数の遺跡が存在することを想定する契機を提供したものといえよう。ここでの「クロスナ層」は北方向に傾斜していたと思われる。その傾度はV-北区トレンチではひじょうに緩やかであり、Wトレンチではかなり急であった。また■-東区トレンチでは標高21.6~18.5mのレベルで「クロスナ層」が検出されている。これはV-北区の「クロスナ層」の標高21.0~18.4mに近いレベルである。これらの「クロスナ層」の傾斜具合と採砂による破壊から免がれた東・南側の等高線の状態とを合わせて原地形の復元的考察を試みるならば、北または北東から湧入した浅い谷頭の存在を想定できる。そこに古墳時代後期に集落が営まれたのではないかと推定するわけである。そしておそらくわれわれが■、Wの各トレンチの「クロスナ層」から採取した土師器や須恵器は、集落の南限がこの付近にあったことを示すものではなからうか。このような想定に誤りがないとすれば、集落の主要部分はずでに破壊されてしまったことにならう。

だが、砂丘の北側斜面で発見された大平浜遺跡で古墳時代後期の集落跡が認められたことの意味

は大きい。というのは、渡子遺跡の立地点とは異なって、北西風の影響等明らかに不利な場所に集落が設置されるには、大平浜のこの地が居住を可能にする条件を備えていたということになるからである。その条件とは、ひとつにはいまでもなく「クロスナ層」の存在である。この層の形成が渡子遺跡B地点の「クロスナ層」群とどのように関連するのかは定かでないが、少なくとも古墳時代後期にも砂丘の変動の相対的な安定期があったということは認めねばならない。あるいは農耕集落の成立にとっては可耕地の存在が決定的な意味をもつことになるのであるが、このことについて大平浜遺跡の場合に考えられるのは、国道9号線と海岸の第一砂丘列との間に東西に細長く広がる低地が最善の耕地候補とみるのが至当であろう。つまりこの低湿地の形成が大平浜に古代集落を立地させることに大きく貢献したものと判断するのである。ただし確定的な見解とするためには第一列背後の低地のボーリング調査等が絶対に必要であり、また今後の調査視点として海浜の遺跡である以上古代の漁業集落の側面も追及していかなければならないであろう。

越峠遺跡については、現状では多くを語る資料はない。遺物の散布地がすでにぶどう園造成のために相当破壊されているので遺構等の残存は考え難いのであるが、なお周辺の砂丘地に遺跡が残っている可能性も十分ある。徹底的な分布調査が実施されるべきであろう。越峠遺跡出土の土器群から知られることは、この地区に奈良・平安時代の集落が営まれていたということである。石見の国府や国分寺・尼寺に近接した地での古代集落の実相の把握は、石央地方のみならず古代史全体にとって重要な課題である。

江津市・浜田市にまたがる大平山遺跡群の確認調査は、待望された長年の課題であった。今回われわれがその宿願の一部を果たしたことになるのであるが、ここに示した調査結果は課題の大きさからすればきわめて不十分なものであることを自認せざるをえない。その意味でこの報告が出発点となって大平山遺跡群の組織的で徹底的な学術的調査が系統的に進められることを心から念願するものである。

(田中義昭・新海正博)

総括を終えるに当たり一言付記する。今次の調査はもともとその実施の必要性が切迫していたにもかかわらず、諸般の事情で条件が整わないという困難な状況下での調査であった。それを越えてこのような形の報告に結実させることができたのは多くの関係者の熱意と献身の賜物と言ふ他はない。江津市・浜田市両教育委員会の全力投球ともいふべき支援、県教育委員会文化課の適切で入念な指導、地元関係者の私心を離れた協力等々は調査成就の決定的な要因であった。ここに調査担当者として心からの敬意と感謝を表明する次第である。また発掘調査と整理作業に困難を厭わず懸命に取り組んでくれた鳥根大学歴史学教室の諸君にも最大の感謝を伝え、その労を多とするものである。

(田中義昭)

- 註1) 角田清美「山陰海岸・江津砂丘地域の地形」(『高地性集落と倭国大乱』・小野忠照博士「退官記念論集」
雄山閣 1984年)
- 2) 註1)に同じ。
- 3) 北条町教育委員会『鳥取県東伯郡北条町 鳥道跡発掘報告書』第1集 1983年3月
- 4) 註3)に同じ。
- 5) 火造正年『鳥根県の縄文式土器集成1』 1974年12月
- 6) 門脇俊彦「原始社会の部相、江津市の縄文遺跡」(『江津市誌』上巻) 1982年
- 7) 註1)に同じ。
- 8) 大西都夫・松田志朗「出雲海岸平野下の第四紀堆積物」(『山政地域研究』第1号) 1985年
- 9) 註1)に同じ。
- 10) 市原寿文・田中義昭「鳥根県出雲市久野遺跡の調査」(文部省科学研究費補助金・総合研究(A)
『縄文時代の低湿性遺跡を対象とした古環境変遷の総合的研究』) 1987年
- 11) 市原寿文「縄文時代環境研究の現状と課題」(『考古学研究』122) 1984年

图 版



1. A地点全景



2. A-1トレンチ黒色土検出状況

図版 2

1. A-Wトレンチ黒色土換出状況
(西から)



2. B地点全景





1. B地点山頂全景



2. B-1 トレンチ上段
黒色土検出状況



1. B-III トレンチ黒色土検出状況



2. B-III トレンチ土層

1. B-IVトレンチ黒色土検出状況
(西から)



2. B-IVトレンチ土層 (赤色砂)

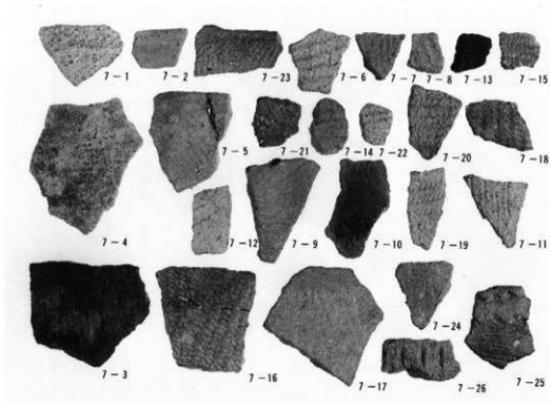




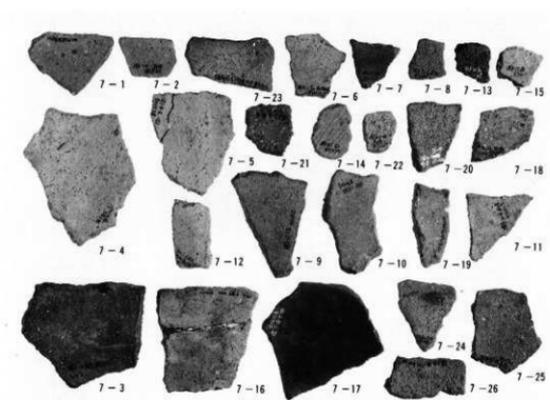
1. B-IVトレンチ土器・石器出土状況



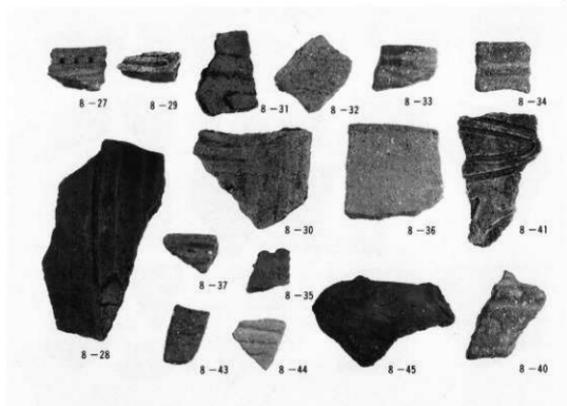
2. B-VIトレンチ南壁土層



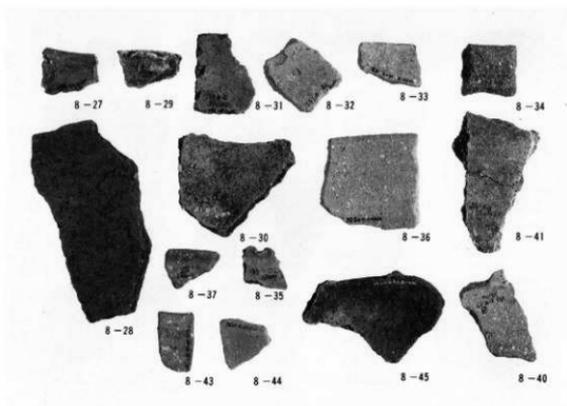
1. B地点出土縄文土器A類, B類 (表)



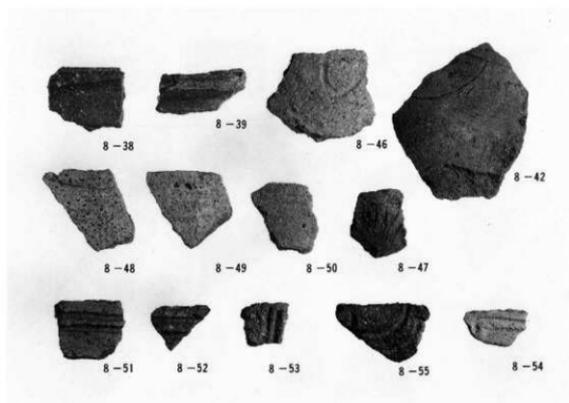
2. 同上(裏)



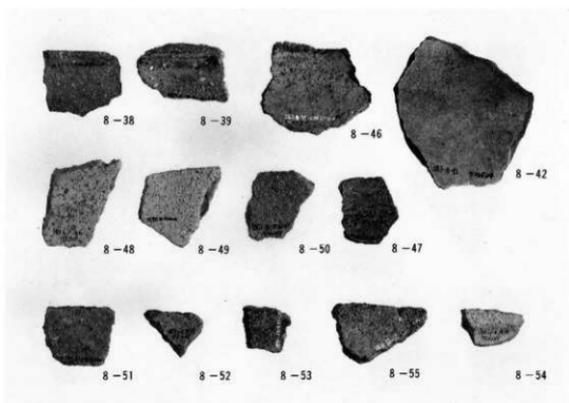
1. 日地点出土縄文土器C類 (表)



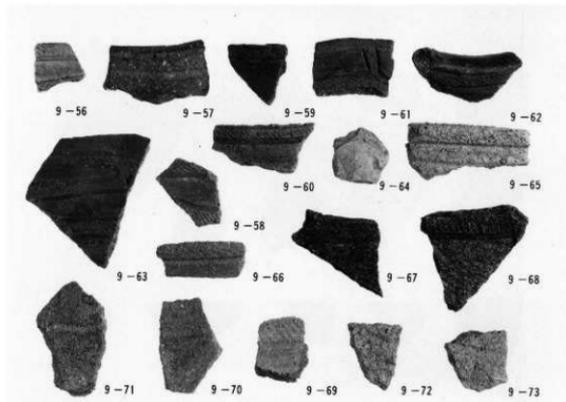
2. 同上 (裏)



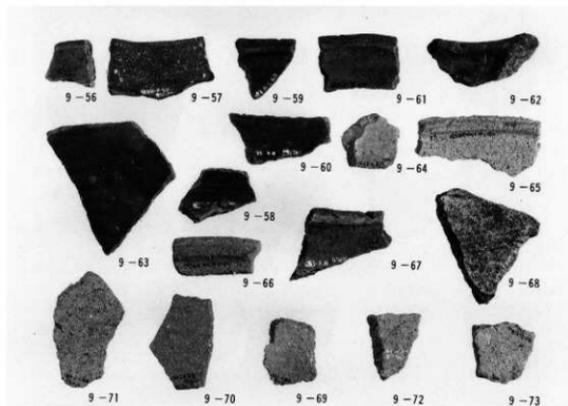
1. B地点出土縄文土器C類(表)



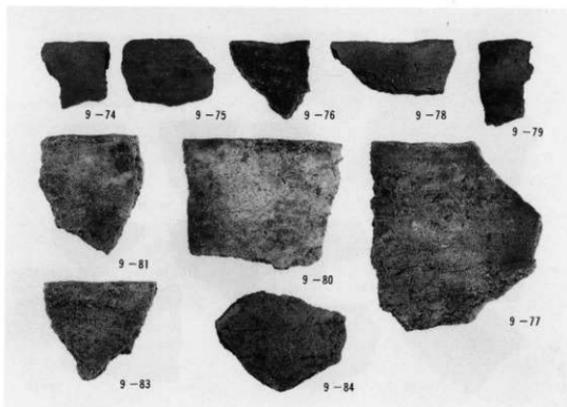
2. 同上(裏)



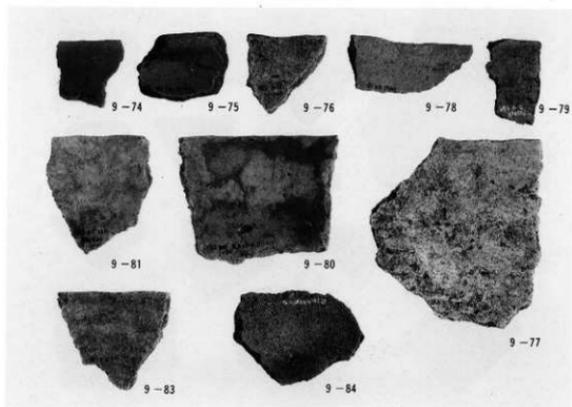
1. B地点出土縄文土器D類(表)



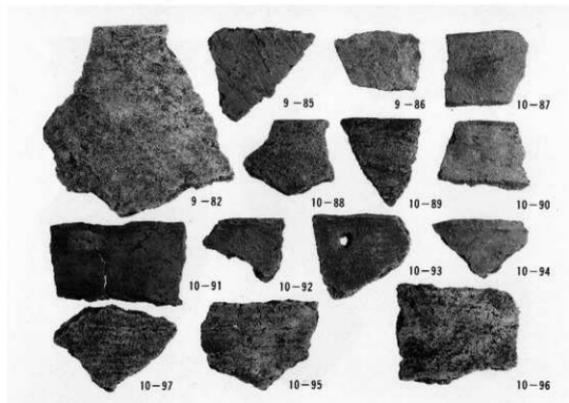
2. 同上(裏)



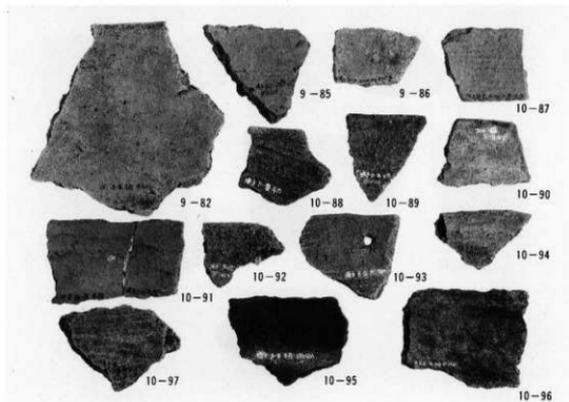
1. B地点出土縄文土器E類 (表)



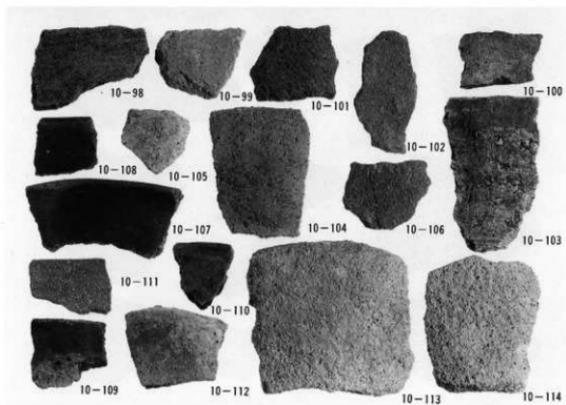
2. 同上 (裏)



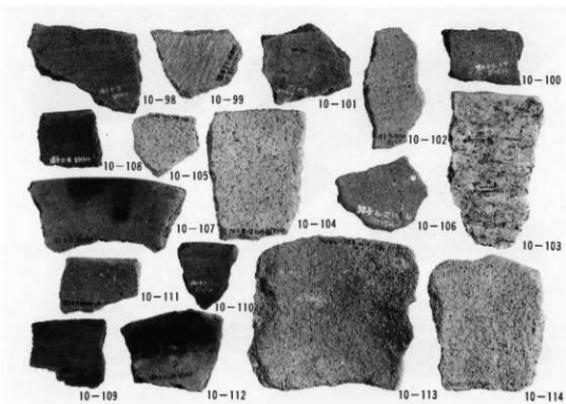
1. B地点出土陶文土器E類(表)



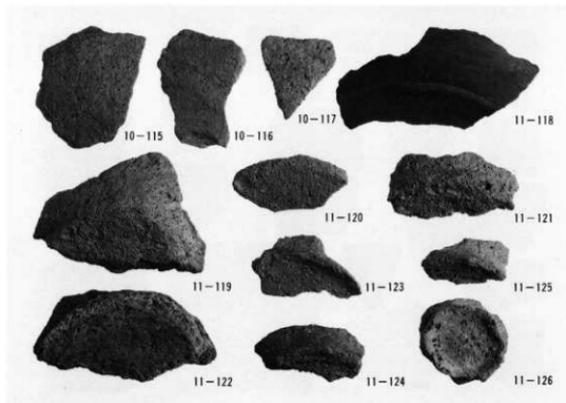
2. 同上(裏)



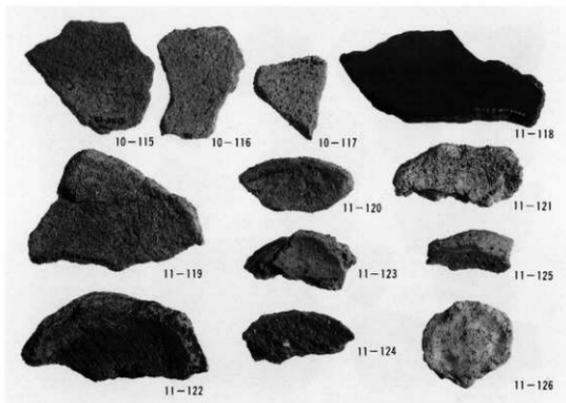
1. B地点出土陶文土器E類・F類(表)



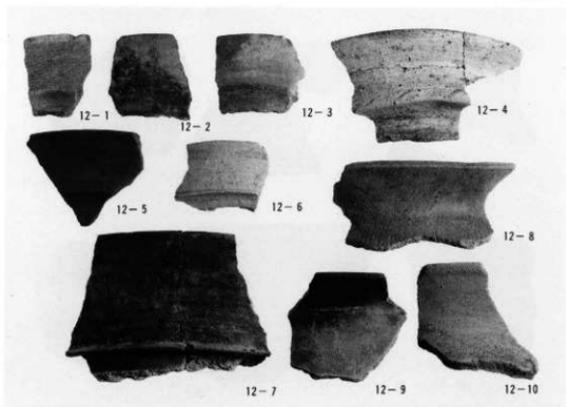
2. 同上(裏)



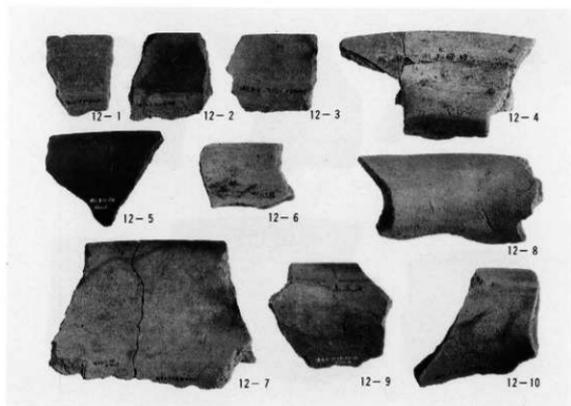
1. B地点出土縄文土器F類・底部(表)



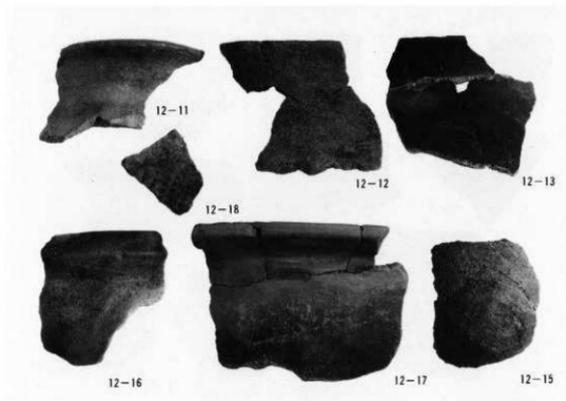
2. 同上(裏)



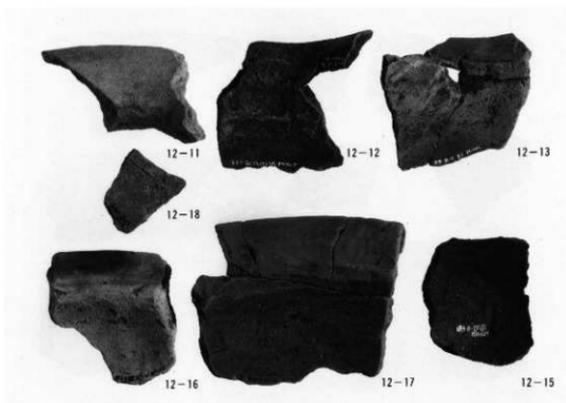
1. B地点出土弥生土器・土師器(表)



2. 同上(裏)



1. B地点出土弥生土器・土師器(表)



2. 同上(裏)



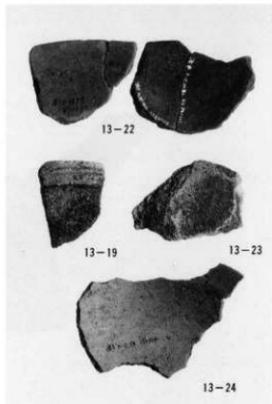
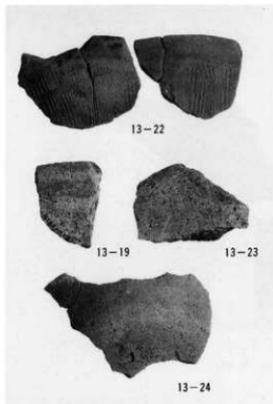
13-21

1. B地点出土土器

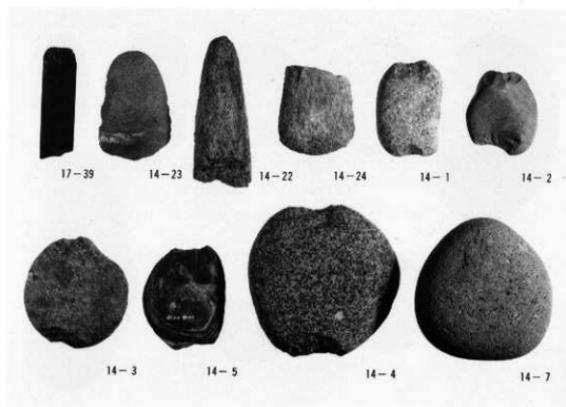


13-20

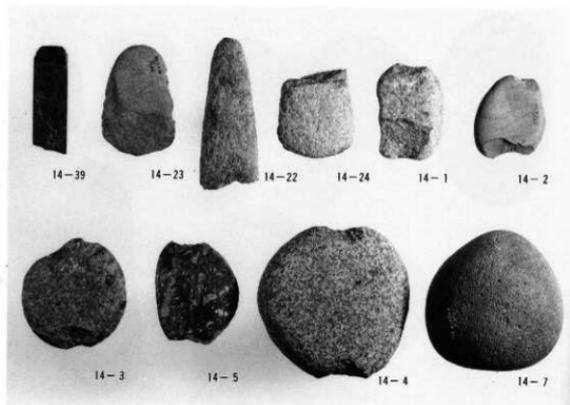
2. B地点出土土器



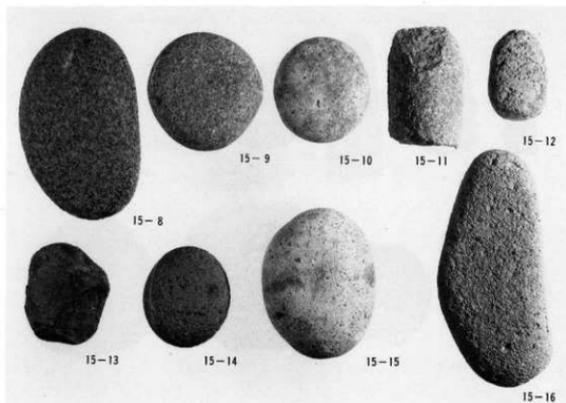
1. B地点出土弥生土器・土師器 (表)
(上左)
2. 同上 (裏) (上右)
3. B地点出土弥生土器・底部 (中)
4. 同 細部 (下)



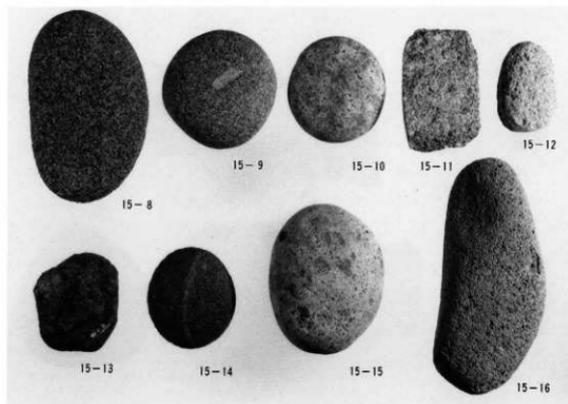
1. B地点出土石器(表)



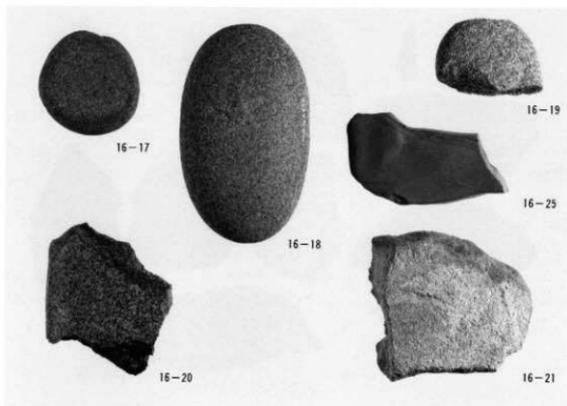
2. 同上(裏)



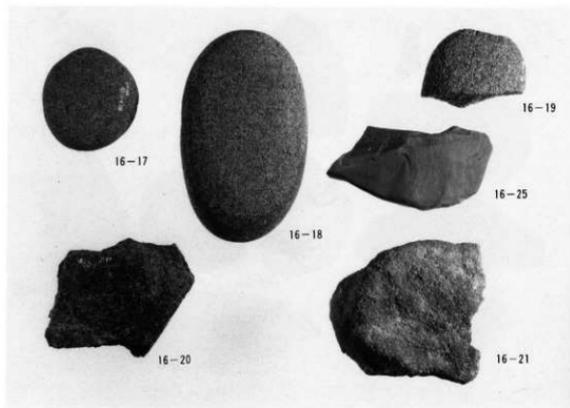
1. B地点出土石器(表)



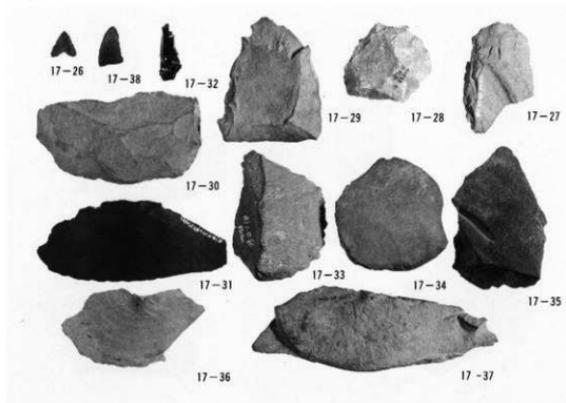
2. 同上(裏)



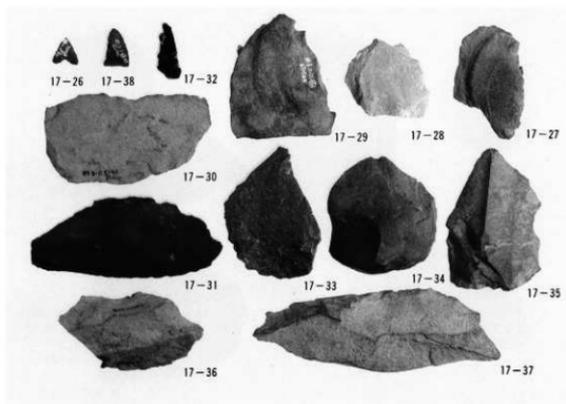
1. B地点出土石器(表)



2. 同上(裏)



1. B地点出土石器(表)



2. 同上(裏)



1. C地点全景



2. C-1トレンチ黒色土検出状況
(北から)



1. C-I トレンチ黒色土検出状況 (南から)



2. 大平浜遺跡Ⅱ トレンチ及びⅢ-E トレンチ



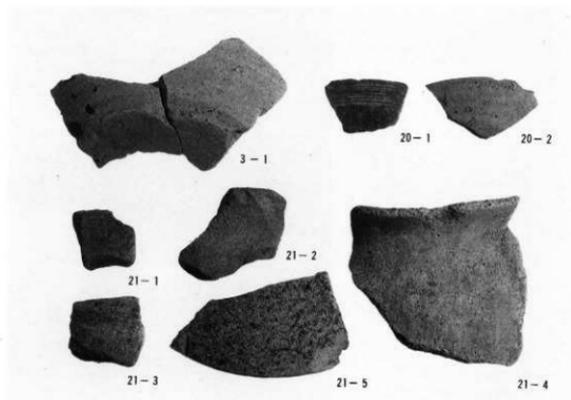
1. 大平浜遺跡Ⅱ-Eトレンチ土層



2. 大平浜遺跡Ⅱトレンチ
黒色土検出状況



1. 越崎遺跡全景



2. 波子A地点・大平浜遺跡出土遺物、越崎遺跡表層遺物

昭和63年3月20日 印刷
昭和63年3月30日 発行

大平山遺跡群調査報告書

発行 江津市教育委員会
島根県江津市江津町954 / 59
浜田市教育委員会
島根県浜田市鹿町1

印刷 衛 谷 口 印 刷
島根県松江市母鹿町29
